



【本プログラム創設者、日本代表】

Kobayashi Noboru ●医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。1927年東京生まれ。1954年東京大学医学部卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。現在は、チャイルド・リサーチ・ネット (<http://www.crn.jp>) 所長、ベネッセ次世代育成研究所所長、子どもの虹情報研修センター・センター長、日本子ども学会代表などを務める。

皆で一緒に子どものことを考えよう

小林 登（東アジア子ども学交流プログラム代表、CRN所長）

ここに、長沙・東京・杭州で開かれた「東アジア子ども学交流プログラム」の3回のシンポジウムがまとめられることは、誠に喜ばしい。

「東アジア子ども学交流プログラム」^①East Asia Child Science Exchange Program、は、現在、中国と我が国とで共同して行っているプロジェクトであるが、開始以来2年目でめざましい成果を上げている。その理由としては、子どもに関心をもついろいろな立場の学者・研究者が学際的に交流していること、我々の言う「子ども学」が「児童科学」として中国側に受け入れられたことが挙げられる。21世紀の科学のトレンドは学際的なものになると言われている

が、我々は「子ども学」によって、少なくとも子どもの領域では問題解決の先端を走っていると言えよう。

「子ども問題」^②children's issues、の解決には、限られた専門分野だけでは十分でないことは明らかで、いろいろな立場の学問を考え合わせなければならぬ。そして、国境を越えての話合いは、それぞれ異なった文化の背景の中で考えることになるので、学際性を超えた異文化比較により、さらに貴重な洞察を得ることになる。今後は、これまでの3回の貴重な経験を生かし、中国の各地でさらに活動を展開しなければ、ならないだろう。中国の広大な国土を考えれば、

東アジア子ども学交流プログラムの概要

- 開催趣旨：育児・保育・教育に関係する東アジアの大学、教授の相互交換講義を支援し、子ども学の普及と国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。
- 主催：チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、華東師範大学
- 共催：（株）ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
- 後援：中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議など
- 事務局：チャイルド・リサーチ・ネット (<http://www.crn.or.jp>)

本プログラムは、2007年11月に上海華東師範大学で開幕し、長沙、2008年に東京、杭州と3回の活動を行いました。

子ども学を広める活動はますます必要となるはずである。また、中国以外の国、特に韓国の学者・研究者も仲間に入っていただき、名実ともに「東アジア」の研究プロジェクトへと発展させたいものである。

子どもは、今も昔も、いかなる文化の中にあっても、大切に育てなければならぬ存在である。世界の平和は、子どもの支援から始めるべきことは明らかである。未来に向け平和な国際社会をつくるためにも、このささやかな「東アジア子ども学交流プログラム」の発展に、我々は努力したい。

【中国代表】

Zhu Jiaxiang ● 華東師範大学教授。学前教育研究所所長。中国学前教育研究会副理事长。上海市幼儿教育研究会副会长兼秘書長。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教育学科養成目標・基準とカリキュラムの研究および実践」、「幼児教育改革実験研究」などを担当する。



子ども学の主張に心より賛同いたします

朱 家雄（華東師範大学教授 東アジア子ども学交流プログラム中国代表）

東アジア子ども学交流プログラムは2007年11月12日に中国の華東師範大学で開幕式を行って以来、中国の長沙、杭州および日本の東京においてすでに3回の活動を成功させております。

東アジア子ども学交流プログラムは、東京大学名誉教授であり、日本国立小児病院名誉院長、C R N所長でもある著名な小児科医の小林登先生の主導で創設され、中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議等の協賛を受け、(株)ベネッセコーポレーションの支援によって運営されております。

その主旨は、育児、保育、幼児教育等に関わる仕事と研究に従事している東アジア各国の大学と大学教授の相互訪問や交換講義を通じて「子ども学」の普及とグローバル化を実現し、子どもに関する各種の問題を解決し、子どもの生活環境を改善して、すばらしい未来を創るた

めに貢献することにあります。私はこのプログラムの中国側責任者を拝命しましたことを誠に光栄に存じております。

私は、小林登先生が提唱していらっしゃる「子ども学」の主張に心より賛同いたします。小林登先生との数多い交流および、3回の東アジア子ども学交流プログラム活動を含む、さまざまな学術活動へ参加する中で、医学、小児科学、脳科学、心理学、教育学、社会学、人類学、法学、工学、建築学等の自然科学・社会科学・人文科学が有機的に結びついてはじめて、子どもが直面する各種の問題を総合的に探求し、解決できるものであると、深く会得致しました。

東アジア子ども学交流プログラムの活動を組織し、それに参加する過程において、中日両国の、子どもに関するさまざまな学術分野の専門家が一堂に会し、互いに切磋琢磨し、相互に協議するという光景を目にいたしました。両国トップの専門家が学術的な相互の働きかけによ

り新しい思考をほとばしらせ、新たな戦略と方策を生み出すことができるということを、私は肌で感じ、感銘を受けたのです。

東アジア子ども学交流プログラムのこれまでの3回の活動では、「子ども学の意味」「異文化の比較研究」および「子どもにやさしい「チャイルドケアリング・デザイン」」等のテーマが議題となりました。中日両国の子ども研究に関する理論と実践に携わる者による熱い討論は、学術的発展を促進したばかりでなく、中日両国人民の交流と友情を増進させました。

私は、東アジア子ども学交流プログラムがこれまでの経験を総括した上に、さらに大きい収穫を得ることができるよう切に望んでおります。我々が力を合わせて協力し、これまでと変わることなく、絶え間なく努力すれば、我々はきっと今よりもいっそうの成功を収めることができる、確信しております。

安梅勅江

Anne Tokie



保健学博士。筑波大学大学院人間総合科学研究科教授。スウェーデン・ヨンシヨピング大学客員教授。

1984年東京大学医学部保健学科卒、1989年東京大学医学系研究科大学院博士課程修了。専門は、生涯発達ケア、地域ケア、国際保健福祉マネジメント。国際保健福祉学会理事、日本保健福祉学会理事、ワシントン大学子どもアセスメントインストラクター。

一見真理子

Ichimi Mariko



国立教育政策研究所国際研究・協力部総括研究官。大学・大学院では、中国語・比較教育学・教育史を学ぶ。中国における子育て、子ども観、幼児教育・児童研究に関心をもち、1年半の北京留学。帰国後、国立教育研究所を拠点として日中教育関係史、アジア地域の教育政策と教育改革、アジアにおける子育て支援と早期教育などの調査研究に参加。

一色伸夫

Isshiki Nobuo



甲南女子大学人間科学部総合子ども学科教授。国際子ども学研究センター所長。NHK放送文化研究所客員研究員。NHKでは、NHK特集「赤ちゃん」など、子ども関連番組を数多く担当。現在、甲南女子大学では、子どもとメディアの良好な関係を構築するための「子どもメディア学」の研究と実践を行なっている。

内田伸子

Uchida Nobuko



学術博士。第20期・第21期日本学術会議会員。お茶の水女子大学理事・副学長。専門分野は発達心理学・認知心理学。1946年群馬県生まれ。1968年お茶の水女子大学教育学部卒業、1970年同大学院人文科学研究科修士課程修了。1998年同大学院人間文化研究科教授。日本発達心理学会理事、日本教育心理学会常任理事。

榊原洋一

Sakakihara Yoichi



医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会副代表。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒業。東京大学小児科講師を経て、現職。

首藤美香子

Suto Mikako



人文科学博士。白梅学園大学子ども学部子ども学科准教授。専門は子ども観の社会史・児童文化論・比較幼児教育学。特に、日本の子ども観の転換期の構造を「出産・育児」に関する言説と実践の分析を通じて研究してきた。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻修了。2001～2004年中国社会科学近代史研究所・客員研究員。

多田千尋

Tada Chihito



東京おもちゃ美術館館長。
芸術教育研究所所長。早
稲田大学文化構想学部講
師。1961年東京都生
まれ。明治大学法学部卒
業後、ロシア科学アカデ
ミー就学前教育研究所、
国立玩具博物館の研究生
として幼児教育・児童文
化、おもちゃなどを学ぶ。
近年は、子どもの福祉文
化論及び世代間交流の実
践・研究、高齢者福祉に
おけるQOLの向上とア
クティビティケアの連係
を目指す。

山本登志哉

Yamamoto Toshiya



教育学博士。早稲田大学
教授。子どもとお金研究
会代表。その業績が認め
られ、中国の朱智賢心理
学賞受賞。日本質的心理
学会理事・編集委員。法
と心理学会常任理事・編
集委員長。1959年青
森県生まれ。呉服屋の丁
稚を経て、京都大学文学
部・同大学院で心理学専
攻。奈良女子大学在職時
に文部省長期在外研究員
として北京師範大学に滞
在。

戴淑鳳

Dai Shufeng



発達・教育心理学修士。
北京大学第一臨床医学院
小児科教授。中国優生科
学協会、優生優育協合理
事、中国未来研究会教育
分会主任委員など、児童
研究に関する団体の数多
くの要職を務める。北京
東方聖童児童発達研究セ
ンターの創始者。北京大
学病院が設立した学際
的・国際的なネットワー
クをもつ周産期―新生児
専攻のパイオニアとして
も知られる。

傅根躍

Fu Genyue



浙江師範大学教育学院心
理学部教授、発達と教育
心理学修士課程指導教
官。1996年アメリカ・
モンタナ大学、1999
年カナダ・クイーンズ大
学にて、客員研究員とし
て研究を行い、2002
年浙江省の「151」人
材に選ばれる。専門分野
は、教育と発達心理学・
心理測定学。

黄紹文

Huang Shaowen



教育学修士。中国長沙師
範学校副教授。長期にわ
たって教師の教育に携わ
る。主な論文・著書に『学
前教育の生態学的思考』、
『中国伝統的な児童遊戯
観深析』、『中国学前教育
研究百科全書（教育理論
編）』など。2005年、
第一回中国宋慶齡幼兒教
育賞を受賞。

秦金亮

Qin Jinliang



心理学博士。浙江師範大
学杭州幼兒師範学院院
長。中国教師教育学会幼
稚園教師委員会理事長。
中国心理学会教育心理学
専攻委員会委員。浙江省
就学前教育学会理事長。
近年、子どもの発達研究、
認知発達神経科学などの
研究に携わり、子どもの
自伝的記憶における文化
と神経の構築、子どもの
発達における文化的安全
性などの領域で独自の道
を切り拓いた。

目次

巻頭言	000
講演者プロフィール	002

序章 ● ご協力いただいた先生方のコメント	005
-----------------------	-----

第1章 ● 東アジア子ども学交流プログラムの発足（中国・長沙にて）	011
-----------------------------------	-----

① 子どもの育ちに大切なもの、「生きる喜び（いきどよみ）」	小林登	012
② 子どもの「遊び力」が危ない	多田千尋	015
③ 子育て・子育てエンパワメント	安梅勅江	018
④ 子どもの社会性の発達とその障害	榎原洋一	023

第2章 ● 子どもの成長・発達と生活環境（日本・東京にて）	027
-------------------------------	-----

① 中国人から見た「小皇帝の涙」	朱家雄	028
② 発達認知神経科学と早期教育	秦金亮	032
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解	黄紹文	034
④ シンポジウム1…日本から見た「中国の子どものいま」	山本登志哉	036
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」	首藤美香子	039
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ	一見真理子	043
⑦ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ	一見真理子	045
⑧ シンポジウム2…日中比較―「子ども・発達・文化」	榎原洋一	049

第3章 ● 第3回 チャイルドケアリング・デザイン（中国・杭州にて）	051
------------------------------------	-----

① Child-care Design (CCD)	小林登	052
② 子どもが見る世界	朱家雄	056
③ 幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめぐる	秦金亮	058
④ 子どものウソは「嘘」?	内田伸子	062
⑤ 発達障害と保育	榎原洋一	066
⑥ 幼児の社会的グルーミング	傅根躍	071
⑦ 子どもの感覚・知覚発達障害と家庭教育環境のデザイン	戴淑鳳	074

East Asia Child Science Exchange Program

〔発行日〕2009年3月31日

〔発行〕チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビル
(株)ベネッセコーポレーション内

〔編集人〕後藤憲子

〔編集スタッフ〕木下編集事務所、CRNスタッフ(劉 愛萍、松本留奈、岩崎菜穂子、桜井玲子、張 志剛、武文)

〔デザイン〕森一典デザイン事務所、富田淳子

ご協力いただいた先生方からのコメント

第1回から第3回までご協力をいただきました先生方より、本プログラムに関するご感想・ご期待がたくさん寄せられています。（登壇順）

◆東アジア子ども学交流プログラムに参加して

● 榊原洋一 ● お茶の水女子大学教授

今まで私には、中国は近くて遠い国という印象がありました。国際学会で北京を数回訪れた経験から得られた印象は「人が多くてダイナミックな国」といった程度のものでした。

3回の交流プログラムを経験して、基本的な印象は変わりませんが、さらに加えて「教育熱心な国」という印象が加わりました。

日本は学歴社会と言われます。明治維新によつてかつての身分制度を廃棄した日本では、全ての国民が平等であり、能力さえあれば出自

に関係なくどのような職業に就くこともできます。しかし、同時に教育による格差が新たな階層を作り上げているとも言われます。

広大な国土と、多種多様な民族によつて構成されている中国の都市部では、かつての日本のような、能力による平等主義が広まりつつあるように思えました。幼児教育への強い関心も、「教育を受ければより多くの自由が享受できる」という自覚が多くの国民に共有されていることの反映のように思われます。

一人つ子政策、急激な経済発展、そして多民族による軋轢という、日本にはないダイナミックな変動の中にいる中国に、私たちが学んできたことを伝えると同時に、日本の子どもの発達に関する重要なメッセージを得る場所として、東アジア子ども学交流プログラムから多くのことを学ぶことができたと思います。

回を追うごとに、討論の内容が深化しつつあることも実感します。来年度はどのようなテーマで行われるのか、今から楽しみにしています。

◆新しい時代を担う「東アジア子ども学交流プログラム」

●多田千尋 ●芸術教育研究所所長

「東アジア子ども学交流プログラム」に参加させていただき、新しい時代のアジアの文化交流の状況が大きく変わりつつあることを感じさせられました。

毛沢東の生まれ故郷である長沙での第1回の学術交流においては、中国での幼児教育のたくましいエネルギーと大きなうねりに触れることができたことは貴重な体験となりました。8時間もかけてバスで駆けつけた幼稚園教師をはじめ、私が日本から持ち込んだおもちゃの展示会

を食い入るように見つめる数多くの眼差しと出会い、中国が如何に子どもの教育に真剣に取り組みつつあるかを知ることができました。

また、会場となった長沙師範大学に新設された「玩具学科」の学生たちからは、10年先には中国を真の玩具産業大国にしたいという意気込みをひしひしと感じました。

同じ歴史の流れを汲み、親近感を感じざるを得ないアジア諸国が、21世紀の社会を担う人材育成という貴重な事業を、相互に手を携えて行

うことに大きな意義を感じます。そして、小林登先生を中心とした「東アジア子ども学交流プログラム」のメンバーの一員に加えていただいたことに大変感謝しております。

10年間のタイムスパンの構想であるとお聞きしています。残り7年間に、このプログラムがさらなる大きな発展を遂げることを期待しております。

◆変わるもの 変わらないもの 変えてはならないもの —東アジア子ども学のエンパワメントに向けて—

●安梅勅江 ●筑波大学大学院教授

第1回東アジア子ども学交流プログラムに参加させていただき、朱家雄先生はじめ、中国の研究者および実践の場の皆さんと交流することができました。その中で、変わるもの、変わらないもの、そして変えてはならないものを、皆さんと共有できたように感じました。

豊かな生活に向けて、経済環境は大きく「変わるもの」です。家族・親族とのかかわり方や、地域が刻んだ歴史・文化は民族ごとに固有であり「変わらないもの」です。子どもの最善の利益を守り、健やかな成長を促す環境を整備するという、私たち大人にとっての国境を超えた責

任は、時間を経ても「変えてはならない」普遍的なものです。東アジアの研究者、実践者、保護者と子ども、地域の人々が皆で手をつなぎ、グローバルに望ましい子育て環境を作り上げる取り組みは、まさに時宜を得たものと考えます。

その際に大切なのは、子どもたちの明日に向けたビジョンをとともに語り合い明確にすること、個人、地域、社会の力を最大限に発揮できる仕組み、すなわち「エンパワメント」する実質的な推進拠点を準備することです。

まずはさまざまな形でコミュニケーションを継続し、相互理解を促すこと。そして一緒に

プログラムを企画し、運営する双方向の参画を実現すること。さらにそのプログラムの意義を明確にする科学的な根拠を提供すること。この3つがそろってはじめて真のエンパワメントが実現します。

本プログラムはお互いの哲学、知識、技術を共有しながら、「変わるもの」「変わらないもの」

「変えてはならないもの」について、その関係性と推移を見極めながら、今後さらに科学的な根拠を蓄積していく第一歩となりました。

このような機会を提供いただいた小林登先生はじめスタッフの皆さまに深く感謝するとともに、さらなる展開を心より楽しみにしております。

◆子ども学の交流の輪を他のアジア諸国にも広げてほしい

● 内田伸子 ● お茶の水女子大学副学長

2008年10月31日、11月1日に浙江師範大学杭州幼児師範学院で開催された第3回東アジア子ども学交流プログラムに参加いたしました。浙江師範大学、華東師範大学や北京師範大学の研究者、学生、浙江地方の幼児教育者の参加を得て、2日間、非常に充実したプログラムが展開されました。

まず団長のCRN所長、小林登先生より「子どもの発達の見点に立つ養育環境の構築(Child Caring Design)」の構想が披露されました。この構想を実現するためには、小児医学、心理学、社会学、工学などの学際・連携・協働が不可欠であるとの基調講演を受けて、日本と中国の研究者の学術研究の発表が行われ、CCDの実現

に向けて大人は何かができるかについて意見交換を行いました。

同時に幼児師範学院で開催された「日本グッド・トイ展」も盛況であり、附属幼兒園をはじめとして、設備の完備した幼兒園、質の高い保育を行っている幼兒園ツアーもよい体験になりました。

浙江師範大学杭州幼児師範学院附属幼兒園には、教師教育のためのハーフミラーで仕切られた模擬保育室が設置されており、学生の教育に活用しているとのことで、素晴らしい試みであるとの感想をもちました。

総括のパネルディスカッションでは、保育ビデオを観て、3、4、5歳児の発達の違い、保

育者の子どもへのかかわり方の違いを観察した後、日中の研究者がそれぞれの学問分野から、保育について論評し、会場の参会者を交えた意見交換を行いました。具体的な映像は、口で説明するよりはるかに雄弁です。その映像から何を切り取ってくるかに、各研究者の関心や保育についての見識がよく表れていて、たいへん興味深いパネルディスカッションになったと思います。

保育カンファレンスのやり方として今回、杭州幼児師範学院の秦先生が準備された方法は、たいへん効果的であると思いました。今後、同じビデオを観て保育や子どもの発達について意見交換するという方法を取り入れて、子どもの

発達の見点に立ったCCDの実現に向けての討論の機会を増やしていきたいと思いました。

今後は、日本と中国だけでなく、韓国やベトナムなどにも参加を呼びかけ、交流の輪を広げていけたらと願っています。

◆大きなうねりの中の東アジアの子どもたち

● 一見真理子 ● 国立教育政策研究所 総括研究官

2008年4月開催の、第2回東アジア子ども学交流プログラム（於お茶の水女子大学）に参加し、これまで自身が身をおいてきた日中の子どもをめぐる研究交流が、双方より胸襟を開いて、一層実りあるステージに入る場に同席できた喜びを噛み締めました。シンポジウム翌日の中国側研究者の皆さんのためのスタディツアー・プログラムでも、その思いを一層強くしました。

清朝末期の中国と明治後期の日本とが幼児期において接点をもった恩物保育の原資料をお茶の水女子大学の歴史資料館で参観。当時、「近代化」新しい国づくり」のビジョンのもとに、フレールベルの考案したこの遊具を日中の指導者たち、保育者たちはそれぞれどんな思いで導入していったのかを考えさせられました。そし

今回、実りある会議を開催できたこと、話す機会をいただきましたことに深く感謝しております。最後になりましたが、この会議の開催をサポートしてくださったベネッセコーポレーションの松澤拓也さん、ベネッセ次世代育成研

究所の後藤憲子さん、劉愛萍さん、ベネッセ上海支社の皆様のきめ細やかな配慮とサポートに感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

て今日のお茶の水幼稚園・いずみナーサリーでの子どもへの配慮にあふれた保育を間近にし、キッズニア・ジャパンや東京おもちゃ美術館といった新しい体験型施設をも見学することができました。今後中国での保育環境デザインの一線に従事する専門家からの嬉しいコメントやときにはあっと驚く反応は、実に興味深いものでした。同じ場においても感じるものが、目に入るものが違う、このことは貴重です。

歴史と風土によって培われてきた大人と子どもとの関係性や、子どもたちの育つ環境そのものが同じ東アジアといっても互いに大いに異なります。今回の交流の中でもそのことが再確認できましたが、改めてそれを起点に何ができるかが問われます。

これからの子どもたちは、どこに生まれ落ち

たととしても、このグローバル化・インパクトの中で、否応なしに変動にさらされる多難な未来を乗りきっていくかなければなりません。だからこそ、大人になって花開くための真に豊かな子ども時代を…ということになります。現実には生やさしくない問題が遍在します。東アジア地域の子どもたちとそれ以外の地域の子どもたちが、近い将来・遠い未来に、大きな共感をもって出会い、語り合い、手を携え合うことができるようにするためにも、子ども学交流の果たす地道な役割は、実に大きいと思います。

◆東アジア子ども学交流プログラムに寄せて

● 山本登志哉 ● 早稲田大学教授

第2回東アジア子ども学交流プログラムに参加させていただき、朱家雄先生はじめ、中国の研究者の皆さん、幼児教育の現場の皆さんとの意見交換を行なうことができました。往々にしてこのような交流は儀礼的なものに終わりがちなところですが、お互いの「文化の違い」を大事にしなが、改めて自分の姿を見つめ直し、そこから新しい交流の基盤を探るという性質のプログラムであると感じました。

異質なものの同士の交流というのは、大きく言って二つの基盤をもつと思います。一つはお互い同じ人間として、人類の一員として共通にもつ性質です。それはたとえば、人間の体がつ生理学的な構造、それに基づく普遍的な発達の道筋といったものの中に見い出すことができます。そのような共通の基盤をベースに、お互いにもてる知識や技術を交流させ、人類がもつ共通の問題に対して共同した対処を模索していくこととなります。

もう一つはむしろ「異質」であることそれ自体、お互いに理解しきれない存在であることそれ自体を基盤とするものです。精神をもち、文

化的に生きている私たちは、「物」としては普遍的に共有されているこの世界に、さまざまな「意味」という個人的で文化的な色彩を読み込んで生きています。私たちの幸福も不幸も、生き甲斐も、死への思いも、いずれもそういう「意味」の世界に打ち立てられていくものです。この意味の世界を他者と分かち合い、調整しあつて、私たちは日々の暮らしを送っています。その分かち合い方が個人によって異なり、そしてまたその人が生きている社会によって大きく異なります。

そのような文化的な意味世界の差異は、いつまでもお互いに決して理解し切れないものです。それは「人と人が決してお互いに理解し尽くせない」ということ、「必ずズレを残し続ける」ということもパラレルです。だからこそ、時にそのズレと誤解によって、人々は文化によって他者を抹殺するようになってしまっています。けれども、ここで視点を変えてみると、「理解できない異質性をもち続ける」ということは、「私たちが個人としても、社会の一員としても、いつまでも多様性のある生き方をもち続けられ

る」ということを意味しています。お互いに異なる存在だからこそ、私には決してできない生き方を相手がしてくれているからこそ、両者がつながることに意味が出てくるのです。赤と赤を合わせても赤にしかならない。同じ者同士が合わさっても、同じ者しか生まれません。けれども、異質な者同士が合わさると、そこにそれまでなかったさらに豊かな意味の世界が展開していきます。

ですから、ここに「異質であること」というもう一つの交流の基盤があることとなります。朱家雄先生が強調された文化心理学の視点は、そのような「異質を基盤にした交流」という考え方にもつながっていきます。そのことをあの議論の中でお互いに確認することができたのではないかと。そんなことを感じる事ができたのでした。このような場をご提供くださった小林登先生はじめスタッフの皆さまに、心より感謝を申し上げます。

◆「東アジア子ども学交流プログラム」に参加して感じたことと活動への期待

● 首藤美香子 ● 白梅学園大学准教授

地球規模で進む環境破壊、宗教対立と民族紛争による戦争の脅威、大量消費社会の浸透と情報化の加速、深刻化する少子高齢化、そして顕在化する生活格差。子どもを取り巻く社会条件は日々変容し続け、子どもを産み育てることの価値観は揺らいできている。そして、現代日本ではともすれば、大人の論理が優先されて、「子どもの存在」や「子どもらしさ」が認められにくい、「子どもが子どもらしく生きづらい社会」になってきているといえないだろうか。

私自身の子育て経験を踏まえるならば、子どもが失敗や挫折をすることを事前に回避すべく、大人の都合で安全で葛藤の少ない環境が用意され、短期間で効率よく結果を出すために必要な情報が予め選択されて提供されるなかで、子ども自身が自らの関心や興味をゆつくりと育て、「異質の他者やもの」との出会いを重ねて試行錯誤しながら、社会のなかで居場所を見つけて自己表現していくのが難しくなってきたりするように感じられる。

そうした錯綜した状況において、子どもに寄り添って、子ども自身が成長していくことを「信

じて待つ」ことができ、子どもと大人がよりよい関係を結んでいけるように媒介者となる専門家の役割は、過去のどの時代にもまして重要になってきているように思われる。「子どもが子どもらしく子ども時代を生きられる」、そんな当たり前のことが当たり前に保障される社会の実現に向けて、「子ども学」の英知を結集させていくことが、私たちに求められているといえるのではなからうか。

「子ども学」は、子どもの心身の成長発達と生活文化に関する総合的な理解を深め、特定の学問的枠組みに捉われることなく、何よりも直接子どもの立場に立って、子どもの福利を最優先にすべく問題解明に臨むための基盤形成に尽力しなくてはならないだろう。確かに、「子ども学」は各専門の境界領域にあって「根なし草」になる危険性も少なくないが、一方で、実際のな子ども理解に基づいた人間形成の思想と実践を創造する可能性も秘めているといえないか。「子ども学」は、「子どもの生き様」を丸ごと捉えて考えていこうとする試みであり、問題解決のための実用的なマニュアルや直接的な処

方箋を提示するものではなく、多様な選択肢を示すことで議論を活性化させ、大人と子どもの関係の新たな地平を拓くものであってほしいと願う。

「子どもの存在」や「子どもらしさ」が認められにくい、「子どもが子どもらしく生きづらい社会」において、「子どもがいる」ということと自身が現代社会に投げかける意味、子どもに対して我々が何をなすべきかによって今後の社会の行方も変わってくるということについて、この交流プログラムを通じて国内外の多様な分野の専門家の間で議論されることを期待してやまない。

第1回 東アジア子ども学交流プログラムの発足



■主催・チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、中国長沙師範専科学校
■共催・㈱ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
■後援・中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、
日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

East Asia Child Science
Exchange Program

① 生きる喜びいっぱい

② 子どもの「遊び力」が危ない

③ 子育て・子育てエンパワメント

④ 子どもの社会性の発達とその障害

子どもの育ちに大切なもの、「生きる喜びいっぱい」 Joie de Vivre

小林 登

Kobayashi Noboru (医学博士)
チャイルド・リサーチ・ネット所長
東京大学名誉教授
国立小児病院名誉院長

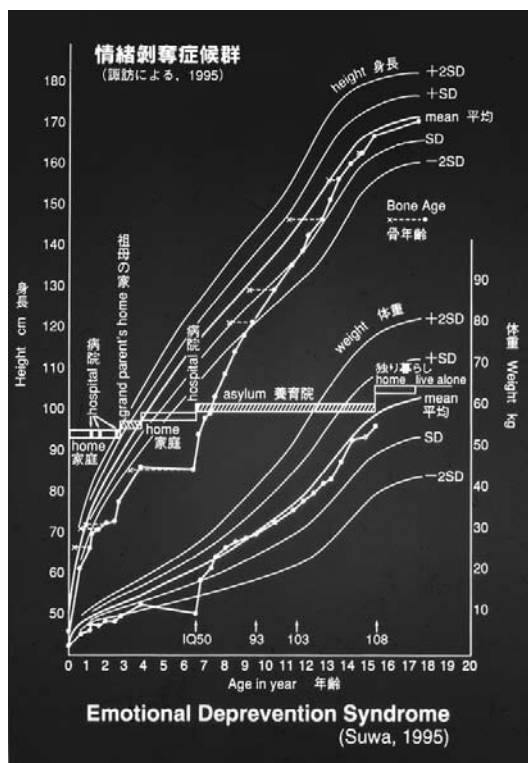
●虐待により身長・体重の伸びが止まる

子どもの体の成長・心の発達にとって何が一番大切かということをお話したいと思います。

私は、子どもが、遊ぶ喜び、学ぶ喜び、そして生きる喜びいっぱいになる——フランス語ではこれを「Joie de Vivre」(ジョワ・ド・ヴィール)と言いますが、そのような状態になることが一番重要だと思います。

我が国では残念なことに、最近母親にかわいがられない子どもが増えていきます。いわゆるネグレクトされる子どもであり、従来エモーション・デプリベーション・シンドローム(母性剥奪症候群あるいは情緒剥奪症候群)と呼ばれていました。そのような子どもの発育に関するグラフをご紹介します。——図1

図1



これは、母親によって心理的に虐待されたひとりの子どもの身長曲線と体重曲線です。上が身長曲線、下が体重曲線で、向かって左の端が生まれたときです。下の横軸は年齢です。ちょうど四歳のころから身長曲線が平らになっています。そして体重曲線は少し下がっています。それは、病院から虐待を行なう母親のもとに帰った時期で、体重増加が止まったり、身長の増加が止まったりしてしまったのです。

この、身長が1センチも伸びない、体重は少し下がっている直前の時期は、身長の伸び、体重の増加もよいことが明らかに見られます。これは、おばあちゃんに世話されているときです。子どもが学齢になり、親から離されて施設に入りますと、身長曲線も体重曲線もどんどん増加して、何本かのなだらかな身長や体重曲線の正常範囲に入っていきます。子どもの体の成長や心の発達に、いかに情動環境、エモーションナルな環境が重要かということがよくわかりになると思います。

●子どもの発達には良い情報が必要

「おぎゃあ」という産声は、お産に驚き、母子分離で不安を感じている悲鳴です。ですから、赤ちゃんの脳の中には不安や恐れのようなものを感じる心のプログラムが、すでにあると言えるわけです。また、産声とともにプログラムにスイッチが入って、呼吸運動が始まります。――図②

産声がおさまると赤ちゃんは首をゆっくり回して周囲を見始めます。新生児覚醒状態と呼ばれます。そして、ファンツによる有名な実験により、新生児でも乳児でも物をじっと見詰める時間は情報量が多ければ多いほど長いということが報告されております。つまり、赤ちゃんはインフォ

メーションシーカー、「情報を求める存在」として生まれます。情報量が多ければ多いほど長く見詰めるということは、赤ちゃんが何か好奇心のプログラムのようなものを生得的にもっていると言えます。

子どもの体の成長には母乳やミルク、さらに離乳食、そして、だんだん大人の食品に変わっていくわけですが、そういった良い栄養が必要です。同時に、子どもの心の発達には良い情報も必要です。そして、それは育児や保育や教育で与えられるものなのです。特に、子どもを生きる喜びいっぱいにする情報は大切です。

●脳の要となる本能・情動脳

子どもは心と体の基本的なプログラムをもって生まれます。それは脳にある基本的な神経細胞のネットワークのプログラムであって、それにスイッチを入れることによっていろいろな行動が現れます。体が成長するにつれ、そのプログラムは、ほかのいろいろなプログラムと組み合わせられて、子どもが複雑な行動をとるように、大脳の高度な精神心理機能のコントロール下に入っていきます。特に前頭葉にある知性や理性の心のプログラムによりコントロールされることが重要になります。

脳は手際よく生きていくために、生存・運動脳、本能・情動脳、知性・理性脳というように進化していったと考えられるわけです。生存・運動脳は生きるためだけの体のプロゲ



図②

ラムの脳であって、本能・情動脳は生存・運動脳の働きをよくするための本能と情動の心のプログラムをもった脳です。これは原始的な哺乳動物の脳であり、さらに高等哺乳動物になって、知性や理性の心のプログラムをもった知性・理性脳に進化したと考えられます。人間の脳はその知性・理性脳の最も進化したものであって、文化、文明をつくる能力までもったと言えると思います。

私が情感や情動を大切にすべきだと考えるのは、生存・運動脳の働きをよくするために、そのような脳が進化してきたと考えられるからです。また、この脳がなければ知性・理性脳も生まれなかったということ、知性や理性の働きにも関係していることも忘れてはなりません。

●脳を動かす理性と感性の情報

脳のプログラムにスイッチを入れるのは情報ですが、その情報を私は理性の情報と感性の情報に分けて考えた方がいいと思っております。理性の情報はコンピューターで処理できるような情報で、同時に理性や知性の心のプログラムを働かせる情報であります。感性の情報はコンピューターで処理できないような、本能や情動に関係する心のプログラムを働かせる情報です。

重要なことは、人間は普通この理性と感性の情報を組み合わせてコミュニケーションをしているということです。代表的なのは、お母さんが赤ちゃんに「ママですよ。いい子ね」というふうに語りかけることであって、そこには言語化された理性の情報がありますが、お母さんらしいリズムやピッチなどもあり、それが感性の情報であると考え

ればいいわけです。

感性の情報に反応する情動の方も進化の過程で大きく変化したと考えられます。原始的なものは快、不快です。快の方は、集団生活を維持するための、また家庭を維持するための心理機序として非常に重要な役割を果たしつつ、私たちが持っている喜びや笑いや愛といったものに進化したと思われます。不快の方は、生存競争に勝つための心理機序として怒りや驚き、あるいは泣くということもある意味では関係しているかもしれませんが、そういう情動に進化したと考えられます。それを私たち人間は理性や知性の心のプログラムでコントロールして、現在のような豊かな文化生活をしているわけです。

『Joie de Vivre』はフランス語ですが、「生きる喜びいっぱい」でポジティブなエモーションの発現であると言えます。大脳辺縁系の機能すなわち本能・情動脳の機能を発現する一つの形だと言えます。子どもたちの遊ぶ喜びいっぱい、学ぶ喜びいっぱい、あるいはお母さんにだっこされているときにあらわれるあの感じがフランス語では『Joie de Vivre』、日本語では「生きる喜びいっぱい」ということになります。

子どもにとって、特に赤ちゃん、乳児や幼児にとって重要なのはこの『Joie de Vivre』であり、そういう機会をつくる必要があると思います。生存・運動脳にある体のプログラムばかりでなく、知性や理性の心のプログラムも活性化するからです。したがって、教育のあり方、育児のあり方、保育のあり方も、このような考え方によってデザインをする必要があると私は考えています。

子どもの「遊び力」が危ない

多田千尋

Tada Chihiro

芸術教育研究所所長

◎おもちゃはコミュニケーションを豊かにする道具

今回私は、自分が館長を務める「東京おもちゃ美術館」から、多くのおもちゃを運んできました。世界各国の多様なおもちゃをお見せしながら皆さんとお話をしようと思います。

これは、ドイツが世界に誇る木製玩具メーカーである「ケラー社」が作っているおもちゃです。ケラー社はほかにも多くの優れたおもちゃを作っているのですが、その中で一番小さなシンプルなおもちゃが代表作となっています。——図④

メーカーの社長がその理由を「この木の車はお母さんの背中を道路にして遊ばせるために作った」と語っていました。おもちゃデザイナーは人間の体が道路になっても気持ち良いようにデザインをきめ細かく工夫しています。

このように、スキンシップ豊かに親子で遊んでもらいたいといった思いが、メーカーマインドとしてあった訳です。ただ、大切なのは、これは気持ちが良いか、良くないかということ、さしたる問題ではなく、こういう遊び方は必ず会話を生み出すということです。このような遊び方で、母親が15分間も黙っていることはまずありません。子どもも親の背中を道路にしてずっと黙って作業に徹するかのようには遊ぶことは考えられません。親子の遊び方一つで、必ず会話が生まれ、「コミュニケーション」に進化するので

す。もう一つ違うおもちゃの例を出す



図④

とわかりやすいかもしれません。日本ではジグソーパズルというのは、一人で完成させる喜びを味わうためにやる方が多いのではないのでしょうか。ですから、日本ではジグソーパズルで遊ぶと会話が生まれません。

ところが、アメリカでは、ジグソーパズルは「ファミリーゲーム」だということです。家族全員でジグソーパズルを楽しみ、夕食後の家族団らんを楽しみます。家族全員でジグソーパズルをやると必ず会話が生まれますから、コミュニケーションの促進剤となります。

要するに、おもちゃというのはどういう遊び方をするかによって、まったく会話が起これない場合もあれば、活発に会話が起こる場合もあります。その会話、コミュニケーションを、私はとても大切にしています。私はおもちゃのことを、コミュニケーションを豊かにする「生活道具」と位置づけています。

◆おもちゃと指の運動、手の運動、脳の発達

これはロシアのおもちゃです。このおもちゃを初めてモスクワで見たときに、子どもたちの行列がすごくていました。遊び方は、どちらが早く巻き取れるかの競争です。—— 図4

私は世界各国へ行っておもちゃをたくさん見ましたが、これほど両手を瞬間的に疲れさせるものは初めてでした。ロシアみたいな寒い国は家の中で運動を促すおもちゃがとても発達します。多分、同じ中国でも北と南では全然おもちゃや遊びが違うのではないのでしょうか。や



図4

はりその国の気候、風土というのはおもちゃにもかなり大きな影響を与えます。

このおもちゃを見たときに、子どもたちがほんとに夢中になって何回も何回もチャレンジしていました。

それで、見ていますと、4歳児は5歳児に勝てない、5歳児は6歳児に勝てないのです。幼児の段階の1年の差というのはやはり大きいです。そうやっておもちゃを通して子どもの成長、発達を教師がつぶさに観察をするということも、とても大切な仕事だと私は思っています。

子どもたちの指の動きや手の動きがいろんな遊びを通じてしなやかになっていくのは、とても大切だと思います。指の活動、手の活動というのは、しつけによってではなくて、多くの遊びによってしなやかになるのです。

ところが、このように子どもたちの手をサボらせない、子どもたちの手を活発にさせるおもちゃは、最近子どもたちの周りから姿を消していつています。今、日本の子どもたちが一番指を動かしているおもちゃというのは、ピコピコピコピコ、ボタンを押すものばかりが多いですね。中国の多くの子どもたちもボタンを押すだけの、それで長時間、画面を眺めているようなおもちゃが随分多くなっているのではないのでしょうか。

子どもたちの手というのはもうすぐれた機能を持った、「ハイテク」機器などかなわないぐらいのすぐれた道具でありながら、宝の持ちぐされになっているような気がします。

例えば、最近ソニーやホンダがロボットを積極的に作っています。

でも、私は歩けるロボットや踊りを踊れるロボットしか見たことがありません。こまを回せるロボットだとか、あや取りができるロボット、折り紙ができるロボットなどというのは見たことがないですね。多分、皆さんがとても得意な中国の伝統手芸「剪纸」（切り紙）ができるロボットなんかもまだ地球上にはないと思います。

でも、皆さんの目の前にいる4歳、5歳、6歳の子どもたちは「剪纸」もできれば折り紙やあや取りもできるわけです。

ですから、そう考えると子どもたちの手というのはすばらしい「ハイレク」機器です。ところが、今の子どもたちは自分たちのハイレク機器は使わずに、目の前にあるハイレク機器だけを使っているのではないのでしょうか。

例えば、私が子どもたちにコマがとてもはやっていました。

〈多田先生が実演され、見事なコマ回しで、会場から一斉に盛大な拍手を受ける〉。

私、子どもたちに手のひらでコマを回して拍手を受けたことは一回もありませんでした。なぜかというところ、当たり前だったからです。誰でもできたのです。要するに、私が子どもたちは手と指を巧みに使いこなすような遊びがたくさん溢れていました。多分、皆さんが子どもたちにもそれはたくさん溢れていたと思います。

ところが、その巧みな指の運動、巧みな指の活動が、



今の子どもたちからどんな姿を消していて、今の子どもたちとても手のひらが栄養失調になっているような気がします。これはとてももったいないことだと思います。

◆おもちゃは子どもとお年寄りの架け橋

最後ですが、私の現在の関心事は、子どもとお年寄りの統合ケアです。日本と中国はどちらも少子高齢社会ですね。お年寄りの知恵とわざを使わなければ損です。大分前にアメリカの研究者と対談をしたことがありますが、その研究者は「お年寄りが町で1人亡くなることは町の図書館が1つなくなることに同じだ」と言っていました。そして、「その町の図書館であるお年寄りには、子どもたちに対して開架閲覧室でなければいけない」ということを言っていました。

そういうことを考えますと、この中国大陸にはたくさん図書館があります。いろんな知恵とわざがこの図書館の中にたまりとたまっていると思います。たくさん昔話を知っています。たくさんさんの遊びも知っています。こういうものをお年寄りの体の中に眠らせておくのではなくて、子どもたちに活用していきたいですね。子どもとお年寄りをつなぐかけ橋としておもちゃはとても有効活用できるのではないかと思います。

子育て・子育てエンパワメント

安梅勅江

Anne Tokie
筑波大学大学院教授

● 一緒に力を発揮すること

私は筑波大学で幼児教育、学校教育、障害児教育のプロを養成しています。今日は普通だったら4年間で教えることをたったの1時間にまとめてお話します（笑）。

今日のキーワードは3つ。「エンパワメント」「根拠に基づく保育」、そして「保育のプロ」です。「エンパワメント」というのは、潜在的な能力を最大限に活用すること。簡単にいうと、「持っている力を引き出す」「元気になる」「みんなで元気になる」ということです。この「みんなで元気になる」は重要なポイントです。

エンパワメントするのには、最も大切なのは「楽しむ」ことです。プロとして皆さん自身が楽しむ。そうしないと、子どもたちは楽しめません。子どもたちが楽しめないと、子どもたちはエンパワメントしま

せん。

学問的に言いますと、「エンパワメント」という言葉を最初に保健、医療、福祉の分野に取り入れたのはソロモンという人で、参加すること、そして一緒に関与すること、相互関係ということを重視しています。幼児教育、学校教育、障害児教育に携わるプロにとって大切なのは、「教育してあげる」ということではなく、「一緒に力を発揮する」ということなのです。

エンパワメントというのには、本人、子ども自身が自分のことをきちんとできるように力をつけていくことです。そして、それができるように環境を整えたり、うまく応援することが私たち、プロの役割になります。

子どもたちは、すごい力をたくさんもっていますよね。例えば、遊ぶ力。それから、驚く力。子どもたちは驚くから、どんどん潜在的な

力が発揮できるのです。それから、おもしろそうだなあと、好奇心を抱く力。創造する力。子どもたちは創造の天才です。そして心地よくする力。赤ちゃんが眠っているだけで、大人はとっても気持ちよくなり、幸せな気持ちになります。そういう、すごい力が子どもにはあります。

こういう「子ども力」は、実は子どもたちだけにあるわけではないですね。実は大人ももっています。そして、とても必要な力なのです。皆さん、保育のプロが、この「子ども力」をたくさんもつことで、子どもたちの「子ども力」も育てることができるのです。

● 調査に基づく科学的な根拠

私たちは日本で10年間、毎年30000人の子どもの追跡調査して、科学的な根拠を出しています。そして何が子ども力を発揮するのに影響するかを、3万人分のデータを使って明らかにしました。エンバワメントの科学的根拠として、これからそのことについてお話しします。

日本では長時間保育が一般的になっています。長時間、保育園に預けると子どもに悪い影響があるのではないかと、たくさんのお母さんたちが心配しています。私たちは、科学的な根拠をもって、その心配は必要ありませんとお話できるようになりました。きちんと質の高い保育園に預ければ、保育園を利用する時間の長さは関係ないことがわかりました。ですから、親御さんたちには、「質の高い保育園を選び、安心して一生懸命働いてください」とアドバイスしてあげてください。

しかし、その一方で、時間の長さにかかわらず、家庭でのかわり方は、大きく影響することわかっています。ですから、「家に帰ったら、子どもと一生懸命、短い時間でもかわってください」というアドバイスも必要です。例えば一緒に食事をとること。1日に1回でもいいのです。家族そろって食事しながら会話する。そういう機会を必ずつくるように勧めてください。それがないと、子どもの将来の発達に望ましくない影響がある可能性があります。

また、子どもと一緒に歌を歌うとか、お話をすることも影響しています。子どものためにしっかりと時間をとって、向き合ってください。時間をつくりましょう。つまりポイントは、「子どものための時間」を、ちゃんとその子のために準備するということです。

また、おうちの中で親御さんだけかわわっているだけではダメです。外に出てさまざまな方たちとかわる、さまざまな機会をもつことが大切です。公園に行ったり、動物園に行ったり、おじいちゃん、おばあちゃんのところに行ったり、お友だちのところに行ったりすると、子どもの言語発達とか対人技術の発達に望ましい効果があります。

制限とか罰は、できるだけ回避しましょう。「だめっ」と言わない。「早く」っていうことも言わない。「○○してはだめ」ではなくて、「大きくならねえ」とか、「○○できてからしようね」というように、優しく語りかけてあげてください。大人でもそうですが、子どもも、意欲を大切に、「すごいね」とほめてあげて、叱らないようにする方が伸びます。

それから保護者への育児サポートも大切です。相談相手がいるとか、

自信がもてる状況があるかどうか。保護者自身がストレスをため込まないようにして、それを解決する手段を見つけられるようなサポートを、皆さんプロが提供してほしいと思います。

●エンパワメントのステップと種類

具体的には、エンパワメントの実践はどうしたらいいでしょうか。これには、ステップがあります。

まず、一番最初に大切なのが「コミュニケーション」です。子どもたちや保護者の方を受けとめる、そして理解することですね。

2つ目のステップが「動機づけ」です。子どもたちや親御さんたちが喜んで参加する、意欲をかき立てられる状況をつくります。

3つ目が「科学的な根拠」です。皆さんがプロであるということは、親御さんや子どもたちにきちんとした根拠を提供できるということなのです。プロとして、きちつと論理立った、将来が予測できるような情報を提供することで、子どもたちも親御さんも安心してエンパワーされます。

さて、エンパワメントには3つの種類があります。「自分力エンパワメント（セルフ・エンパワメント）」「仲間力エンパワメント（ピア・エンパワメント）」「組織力・地域力エンパワメント（コミュニティ・エンパワメント）」です。

「自分力エンパワメント」は、自分で自分を元気にすることです。「仲間力エンパワメント」は、仲間同士で元気になることです。落ち込んだときに仲間と飲みに行くと元気になりますよね。「組織力・地域力

エンパワメント」は、組織とか地域を元気にすることです。幼稚園や保育園全体を元気にしたり、親御さんのグループを元気にしたり、ある地域全体を元気にしたりします。

幼児教育のプロには、この「自分力エンパワメント」「仲間力エンパワメント」「組織力・地域力エンパワメント」の技術をもってほしいのです。専門職の役割は、子どもたち、親御さんたちひとりひとりを元気にするのは当たり前のことですね。プラス、子どもたちの集団、親御さんたちの集団、地域まるごとを元気にする技術を身につける必要があります。

●プロとしての理念

絶対に忘れてほしくないことは、皆さんはプロとして社会の仕組みを変えていくという役割も担っているということです。なぜなら、皆さんは、子どもたちが何を求めているのか、何が必要なのかが一番わかっているからです。皆さんこそが、社会の仕組みを変えていく力をもった方たちなのです。ぜひ子どもたちの代弁者になって、よりよい環境、よりよい社会をつくっていくパワーを発揮していただけたらと思います。これがプロの地域力・社会力エンパワメントの大切な役割のひとつです。

プロにとって大切な理念は、「当事者の最善の利益を守る」ということです。皆さんが、プロであって、アマチュアとは絶対に違うところは、この理念をもっているかどうかです。アマチュアは、もしかしたら裏切るかもしれない。でも、皆さんは絶対に裏切らないで、当事

者の最善の利益を守る。それがプロですね。子どもと保護者が幸せになるように、その最善の利益を守り続けるというプロの意気込みを発揮してほしいです。

そしてプロにはもう一つ大切なことがあります。プロは「新しい価値」を生み出す。毎日同じことをやっていたらプロではないのです。昨日よりも今日の方が、もっと進んだことをするのがプロです。よく専門職は陥りやすいのですが、「去年の運動会もこんなふうにやったから、今年もこうしましょう」というのはダメです。必ずプラスアル

図6

育児環境評価

(専門職による家庭訪問用)

該当するものに○、しないものに×をつけてください。

A 日常生活の中に多様性に富んだ人とのかわりの機会があること

☐ 1. 保護者は子どもが見える範囲にいるようにし時々子どもの方を見る

☐ *2. 保護者は仕事をしながら子どもに話しかける

☐ 3. 保護者は子どもの遊び時間を構成する

☐ 4. 保護者は訪問中少なくとも1回おもしろい遊び方などを子どもに示す

☐ *5. 保護者は毎日少なくとも1回歌を歌ってやる(ハミングでもよい)

☐ 6. 保護者は対談中、訪問以外のことを子どもに話しかける

☐ *7. 保護者は週3回以上子どもに本をみせてやる

☐ *8. 父親(的な役割の者)は週に3回以上子どもの世話をする

☐ *9. 子どもは父母(的な役割の者)と共に毎日1回以上食事する

☐ 10. きょうだい(的な役割の者)が子どもに話しかける機会がある

☐ 11. 保護者は意識的に発達を促すおもちゃを与える

☐ 12. 保護者は子どもに新しい能力を発達させるおもちゃを与える

☐ 13. 保護者はより程度の高いおもちゃ類に関心を持つ

B かわりが情緒的・言語的反応性に富んでいること

☐ 14. 子どもが保護者に向かい発声したら言葉かけなど(5秒以内)

☐ 15. 子どもがほえんだら言葉かけなど(5秒以内)

☐ 16. 子どもが目があったら言葉かけなど(5秒以内)

☐ 17. 子どもが接触してきたら言葉かけなど

☐ 18. 子どもと目があった時しかめ面しない

☐ 19. 子どもが体を動かした時言葉かけなど

☐ 20. 子どもの発声に対し無視することが1度もない

☐ 21. 保護者が会話中子どもが発声したら黙る

☐ 22. 子どもの行動を言葉で表現する

☐ 23. 訪問中少なくとも2回保護者の表情が変化する

☐ 24. 訪問中少なくとも1回保護者は笑う

☐ 25. 訪問中少なくとも2回子どもに自然な話しかけ

☐ 26. 子どもに物や人の名前を言ったり教えたりする

☐ 27. 訪問中少なくとも1回子どもを抱く

ファ、よりよいことをする。新しい価値を生み出すことを心がけてほしいと思います。

最後にまとめさせていただくと、保育と幼児教育のプロにとって必要とされるのは、「哲学——当事者の最善の利益を守る」、「科学——新しい価値をつねに追いかける」、そして「エンパワメント——みんなが元気になる」、その三位一体でプロとしての実践をするということです。皆さんの今後ますますのご活躍を期待しています。

28. 訪問中少なくとも2回子どもを自然にほめる

29. 訪問者が子どもをほめることに肯定的な感情を示す

30. 子どもに対し肯定的な感情を示す

31. 保護者の発音は明瞭で聞きやすい

32. 訪問者と言語的なやりとりをする

33. 会話に適切な長さの文章使用する

〈子どもがぐずった場合の対応〉

34. 訪問者との話をやめる

35. 子どもの位置を変える

36. 子どもに肯定的で同情的な言葉かけをする

37. 声をやわらかくトーンを高くする

38. なだめるしぐさをする

39. 子どもに関心を他に向ける(ゲーム、おもちゃ、顔など)

40. 子どもに対し否定的な発言をしない

41. 訪問者に対し否定的な言い訳をしない

42. 子どもを手荒く扱わない

制限や罰が回避されていること

43. 訪問中子どもをどならない

〈子どもがぐずった場合の対応〉

- ☐ ☐ ☐ ☒ ☐ ☐ ☐

 - 44. 子どもに対する苛立ちや敵対心がない
 - *45. 訪問中子どもをたたかかない
 - *46. 先週子どもをたたかなかったと報告
 - 47. 訪問中子どもをしかったり非難したりしない
 - 48. 訪問中子どもの行為に干渉や制限をしない
 - D 年齢相応の自主性が尊重されていること
 - 49. 子どもの手が自由に動くような状態にしておく
 - 50. 訪問中子どもに探索活動を許す
 - E 子どもの発達状態に見合った物理的な刺激（おもちゃなど）が存在すること
 - 51. 子どもは1冊以上の自分自身の本を持つ
 - *52. 子どものテレビの視聴時間は1分以上5時間未満
 - 53. 保護者是对談中子どもにおもちゃやおもしろい活動を与える
 - 54. 筋運動をとともうおもちゃ(ボールなど)がある
 - 55. 押したり引いたりするおもちゃがある

D

- 56. 子ども用車など移動用のおもちゃがある
 - 57. 家のおもちゃ、役割遊びのおもちゃがある
 - 58. モビールやテーブル、高椅子などがある（空間利用のおもちゃ）
 - 59. 積み重ねることができるとおもちゃがある
 - 60. 絵本やビデオなどがある
 - 61. ラッパやたいこなど楽器がある
 - 62. 保護者は子どもに水や粘土遊びをさせている
 - F. 子どもの外出機会がありさまざまな外部社会に触れること
 - 63. 週1回以上買物に子どもを連れて出かける
 - 64. 週4回以上散歩や公園などに子どもを連れて出かける
 - 65. 保護者との行き来が月1回以上ある
 - 66. 家族以外の者（子ども含）との行き来が週1回以上ある
 - 67. 家族以外の者（子ども含）と週1回以上関わる機会がある
 - 68. 家族ぐるみでつき合っている家族がある
 - 69. 子どもの発達をチェックするために定期的に保健センターなどに連れて行く

F

- | | |
|--------------------------|---------------------------------------|
| G | <p>子どもの発達を配慮した安全な物理的な環境が整備されていること</p> |
| ☐ | <p>70. 子どもが安全な姿勢をとるようになる</p> |
| ☐ | <p>71. 10冊以上の本が見えるところにある</p> |
| ☐ | <p>72. おもちゃをしまう特別の場所がある</p> |
| ☐ | <p>73. ベッドがある</p> |
| ☐ | <p>74. 家の中に植物がある</p> |
| ☐ | <p>75. 家の回りは静かである</p> |
| ☐ | <p>76. 家の中は整頓されている</p> |
| ☐ | <p>77. 屋外の環境は安全である</p> |
| ☐ | <p>78. 屋内の環境は安全である</p> |
| H | <p>日常生活の中で育児に対する社会的なサポートがあること</p> |
| ☐ | <p>*79. 保護者外出時、子どもの世話をする人が決まっている</p> |
| ☐ | <p>*80. 養育者が2人以上いる場合の相互連絡をとっている</p> |
| *…… | <p>報告による記入可能</p> |
- ※出典：「子育て環境と子育て支援（安梅勅江、勅草書房）。なお、本資料をご使用になるときは、必ず、出典を明記してください。

G

- | | |
|--------------------------|---|
| G | 子どもの発達を配慮した安全な物理的な環境が整備されていること |
| ☐ | 70. 子どもが安全な姿勢をとるようになる |
| ☐ | 71. 10冊以上の本が見えるところにある |
| ☐ | 72. おもちゃをしまう特別の場所がある |
| ☐ | 73. ベッドがある |
| ☐ | 74. 家の中に植物がある |
| ☐ | 75. 家の回りは静かである |
| ☐ | 76. 家の中は整頓されている |
| ☐ | 77. 屋外の環境は安全である |
| ☐ | 78. 屋内の環境は安全である |
| H | 日常生活の中で育児に対する社会的なサポートがあること |
| ☐ | *79. 保護者外出時、子どもの世話をする人が決まっている |
| ☐ | *80. 養育者が2人以上いる場合の相互連絡をとっている |
| I | *……報告による記入可能 |
| J | ※出典：子育て環境と子育て支援（安梅勅江、勅草書房）。なお、本資料をご使用になるときは、必ず、出典を明記してください。 |

F

- | | |
|--------------------------|---------------------------------------|
| G | <p>子どもの発達を配慮した安全な物理的な環境が整備されていること</p> |
| ☐ | <p>70. 子どもが安全な姿勢をとるようになる</p> |
| ☐ | <p>71. 10冊以上の本が見えるところにある</p> |
| ☐ | <p>72. おもちゃをしまう特別の場所がある</p> |
| ☐ | <p>73. ベッドがある</p> |
| ☐ | <p>74. 家の中に植物がある</p> |
| ☐ | <p>75. 家の回りは静かである</p> |
| ☐ | <p>76. 家の中は整頓されている</p> |
| ☐ | <p>77. 屋外の環境は安全である</p> |
| ☐ | <p>78. 屋内の環境は安全である</p> |
| H | <p>日常生活の中で育児に対する社会的なサポートがあること</p> |
| ☐ | <p>*79. 保護者外出時、子どもの世話をする人が決まっている</p> |
| ☐ | <p>*80. 養育者が2人以上いる場合の相互連絡をとっている</p> |
| *…… | <p>報告による記入可能</p> |
- ※出典：「子育て環境と子育て支援（安梅勅江、勅草書房）。なお、本資料をご使用になるときは、必ず、出典を明記してください。

*……報告による記入可能

※出典：子育ち環境と子育ち支援（安梅勅江、勁草書房）。なお、本資料をご使用になるときは、必ず、出典を明記してください。

子どもの社会性の発達とその障害

榊原 洋一

Sakahara Yoichi

お茶の水女子大学教授

◎ ADHDの子どもの特徴

今日は、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群についてお話をしたいと思います。

ADHDは、ここに書いてあるように、英語の attention, deficit, hyperactivity, disorder のそれぞれの頭文字をとっています。

日本では1994年にこの診断基準がはっきりと定まって以来、よく知られるようになりました。多分、中国では状況が違っていると思いますが、日本ではそういうお子さんに、あるお薬を使うと非常に効果があることがわかって、特に医者の間では非常に注目されるようになってきます。

ADHDの診断基準としては、9つ出ていますが、全部で18のいろいろな行動の特徴が書かれています。診断をするためには、9つのう

ち6つ以上の項目を満たす必要があります。注意欠陥の症状としては、集中ができない、あるいはいろいろな指示を受けても、それがうまくできない、あるいは順番を追って物事を行うことが非常に不得手であるというような特徴があります。

注意欠陥のほかには、多動と衝動性の症状があります。その中で一番目立つのは、座っていても、もじもじ動き回ってしまうことです。それから、小学校の低学年ぐらいに多いんですが、机に座っていられないで、すぐに気が散って歩き出したり、部屋から出ていってしまう。このような行動も特徴です。そして、何か指示を与えたときにも、最後まで聞かずにすぐに行動してしまう。順番を待つことができない。この9つのうち6つ以上満たすと、多動衝動型のADHDということになります。

ただ、大事なことは、年齢が小さいときは、みんな落ち着きがない

んですね。その年齢の標準に比べてそういう症状がすぐ目立つ場合に診断をします。6か月以上、2か月以上の場所が続いて、日常生活にいろいろな問題が起きた場合に、こういう診断をつけることにしています。

このような人がどのくらいいるか、いろいろな国で調査されています。中国でも1985年に行われていまして、これは全国で行われた調査ではないと思いますが、6%の子どもがそれに当たるといことです。日本は3%ですが、決して日本の方が落ちているということではなくて、調査の仕方によって少し差が出るということであって、ほとんど同じだと思います。

そして、男である私としてはつらいんですが、この障害は男に圧倒的に多い。5倍ぐらいの比率です。思春期を越えると、少し落ち着きが出てきますが、アメリカで大きな調査をしたら、大人でも4%に注意欠陥の症状が、あることがわかっています。なぜそうなるかということこれからお話しします。

● ADHDとワーキングメモリー

こういう、いろいろな行動の特徴がある人を見ると、きつと育て方が悪いんだ、あるいは本人が怠けている、そのように考えがちです。ところが、1人のお子さんがADHDだと、その兄弟は25%から35%、そしてお父さん、お母さんかなり高い率でADHDであることがわかっていきます。つまり遺伝性があるのです。

行為障害は、調査によって少し幅がありますが、平均をとると、

30%ぐらいです。3人に1人の子どもが非行、行為障害になってしまいうことがわかっています。それから、ADHDは、それだけで単独であるのではなくて、いろんなものと合併することがわかっています。

学前教育にとっては重要なことですが、事故を起こしてけがをしやすいこともよくわかっています。私の外来にこういうお子さんが来ますが、まず、お話をしながら子どものひざ小僧を見ます。転んだり、引いたり、切ったりした傷がたくさんある子が多い。

ADHDの子どもは、脳の前方、前頭葉の働きがちよつと十分にかかないことがわかっています。前頭葉には、ワーキングメモリー、作業記憶という、短い記憶をためておく場所があります。ADHDの子どもは、その部分の働きが少し不十分です。

作業記憶、ワーキングメモリーが切れる経験は、皆さん、だれでも知っています。仕事をしていて隣の部屋へ何か物を取りに行ったと思つて、ドアをあけて入った途端に何をしに行ったか忘れてしまう。それが作業記憶が切れた状態です。ADHDの子どもは、それがいつも、ぶつぶつ切れちゃうような状況だと考えればいいかと思ひます。ですから、ADHDの子どもに、まずこの仕事をして、次にこれをしなさいと言っても、一つ終わると、ぶつぶつと切れて、もう何をしていいかわからない。その証拠に前頭部でのブドウ糖の使われ方が少ないという脳科学の結果も出ています。

こういう子どもたちに、実は、メチルフェニデート、商品名リタリンという薬が効くことがわかっています。国によっては使われていないところもあり、中国の状況はわかりませんが、この薬を飲むことで、

このような症状を非常によく抑えられることがわかっています。その薬を飲むと非常に効果が出まして、9割以上の子どもで症状がなくなるということで、日本ではADHDの症状が重い子どもには薬を処方することが普通になっています。

しかし、それ以上に重要なのは、家とか幼稚園、保育園で子どもたちにとの教育、どのような保育を行うか、そのやり方です。こういう子どもたちのために、よりよい教材、教え方などが大変工夫されています。

●自閉症の子どもの特徴

次に、自閉性障害——その中でも高機能自閉症、アスペルガー症候群についてお話をいたします。

診断基準の中では、広汎性発達障害という大きなグループがありまして、その中に自閉症とアスペルガー症候群が入っています。自閉症は、1943年にアメリカのカナーという人が11人の子どもで報告したのが初めてです。

言葉が遅れることがまず第一の特徴です。3歳ぐらいになれば、どんな子どもでも少なくとも片言の言葉をしゃべることができるのが普通です。しかし、自閉症の子どもは言葉がなかなか出てきません。

2番目の対人的相互作用の障害は、自閉症の中で一番大きな症状です。私たちは、言葉を使わなくても相手の人の顔を見れば、怒っているのか、笑っているのか、泣いているのか、そういうことがすぐにわかります。ところが、自閉症の子どもはそういうことがわからないの

です。

3番目の特徴としては、物にこだわって、おもちゃの一部だけに関心をもったり、非常に変わったものに興味をもつ傾向があります。これも大体、男の子に多くて、女の子の4倍ぐらいの子どもが男の子です。

それから、全員には見られませんが、大きな音がしたりすると耳を押さえて逃げてしまう、あるいは、いつも着る洋服が一緒でないと気持ちが悪といった触覚過敏という症状もよく見られます。

8割以上の子どもに精神遅滞、知的な遅れがあります。逆の言い方をすると、2割の子どもには知的な遅れはないわけです。言葉は遅れますが、だんだん出てきます。それから、15%の子どもにてんかん発作があり、脳波を調べると異常があります。

●アスペルガーの子どもの特徴

アスペルガー症候群の話をこれからしますが、自閉症の子どもは、全然言葉を使わなかったり、少ししかしゃべらない。高機能自閉症になると普通のお話ができる。アスペルガー症候群になると、むしろ言葉は流暢に非常に出てということが言われております。

アスペルガー症候群の診断基準が書いてありますが、これは自閉症と同じです。対人的な相互関係がうまくできない。そして、何か一つのものにこだわる、非常に一つのことばかりやってしまう。そういう趣味の偏りももう一つの特徴です。

知的に高くて非常にこだわりが強い子どもは、むしろ小さいときに

は天才児と間違われることがあります。3歳でも、例えば漢字をたくさん覚えてしまうと、カレンダーサバンといって、10年ぐらい先の何月何日と言うと、その曜日がわかってしまうとか、そういう子どもが、こういうお子さんの中にはいます。しかし、そういう能力はあっても、人とかかわっていく、人とうまくやっていく能力が非常に低いというのがアスペルガー症候群です。

アスペルガー症候群の子どもはどんなことで大変かというと、例えば、周りの人の表情とか視線がわかりませんから、怖い顔をしててもアスペルガー症候群の子どもはそのことが理解できません。

そして、人のいろいろな動作などの理解も非常に下手です。人との距離をとることが私たちの社会生活にとっては重要ですが、それができません。

そして言葉で言うと、比喻が非常にわかりにくいという特徴があります。例えば日本の幼稚園では子どもが騒がしいときに、「静かにしなさい」と言うかわりに、このような言い方をします。「ここは、アリのさんの声でしゃべりましょう」と。これは大変頭を使うような指示です。なぜなら、だれもアリの声を聞いたことがないからです。でも、アリは小さいから声も小さいんだろうというのが比喻、類推です。そういうことがアスペルガー症候群の人ではありません。

皆さんは学前教育に関係のある教育者ですから、嘘についてはいけないというように教えています。でも、皆さんは毎日、嘘をついていらっしゃると思います。お世辞です。ですから、園長先生に「この間、上海に行って買ってきたこの洋服、いいでしょ」と聞かれたら、似合わない

くても「お似合いです」と言うのが正しい言い方です。そのようなこともアスペルガー症候群の人は下手です。

ほかにも幾つかありますが、こういう特徴があるために、お話はできて、知的にも普通であるにもかかわらず、社会の中でうまくやっていくことができないのが、アスペルガー症候群の子どもたちや大人です。

アスペルガー症候群とADHDの両方が一人の人にあることもよく知られています。日本の文部科学省の調査でも、0.2%の子どもが自閉的な症状と多動の症状、そして学習障害の3つをあわせもっていることがわかりました。そして、このような発達障害の子どもたちは6.3%、あるいはアメリカなどでは10%、10人に1人の子どもがそういう特徴を持つているわけです。ですから、学前教育をするためには、一つは、教育、心理だけではなくて、このような医学的な知識も一緒にもたなくてはいいけない。そういう時代になっております。

2

小皇帝の涙

——NHKドキュメンタリーに
対する多角的な見方

第2回

子どもの成長・発達と生活環境

第2章



■主催・チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、お茶の水女子大学G・COE
■共催・㈱ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
■後援・中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会
日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

East Asia Child Science
Exchange Program

- ① 中国人から見た「小皇帝の涙」
発達認知神経科学と早期教育
幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

- ④ シンポジウム1：日本から見た「中国の子どものいま」
日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

- ⑦ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ
シンポジウム2：日中比較「子ども・発達・文化」

基調講演

中国人から見た「小皇帝の涙」

朱家雄

Zhu Jiaxiong
華東師範大学教授

●一人っ子政策と中国

中国では70年代の後半から、一人っ子政策が実施されるようになり、すでに30年ぐらい経ちました。この政策の実施で人口がある程度コントロールされた半面、どの家庭も一人しか育てられないので、子どもの生活環境も大きく変わり、いろんな問題が起きています。そのことについては社会全体が強い関心を抱いています。

NHKが撮影した「小皇帝の涙」というドキュメンタリーは、中国で、今どんなことが起こっているのか、これからどんなことが起きようとしているのかを如実に現していると思います。このドキュメンタリーを見て、私自身が子育ての中で経験した、いろんなことを思い出させてもらいました。私がこのドキュメンタリーを見てどんな感想をもったのか。学際的にいくつかの角度から述べてみたいと思います。

●教育学者としての見方

私は、教育を専門としていますが、教育学、心理学、医学を研究する立場の人は、このようなやり方は、非人道的だと判断するだろうと思います。やはり、「子どもたちの発達に対して害がある。子どもたちには楽しい子ども時代を過ごさせてあげるべきだ」という感想をもたれると思います。

子どもにとって子ども時代は少ししかありません。だから、子どもにはたくさん経験をさせて、遊びの中で発達を促していくことが重要です。そうすることで子どもの健全な人格形成ができるのです——教育学者と心理学者は、そのように発達の角度からこの問題を否定的にとらえるだろうと思います。

この「小皇帝の涙」の中で紹介されている状況は、本当に中国のど

※「小皇帝の涙」…2008年1月6日、NHKスペシャル「激流中国」のシリーズ第9回として放送されたドキュメンタリー番組。教育ブームが過熱する中で、一人っ子である子どもたちを叱咤激励し、愛の鞭も惜しまない親たちに対し、悩みや苦しみを訴え始める子どもたちの様子が描かれました。

の地方でも見られるものだと思います。先ほども何人かで議論しまして、都会と田舎では状況が違うのではないかという意見も出しましたが、私は中国のどこに行ってもこれと同じような状況が起きていると答えました。

中国では、改革開放政策が実施されてから20年以上経ちましたが、我々も、このような状況を非常に憂慮して、子ども本位の教育改革を実施して、状況を変えようと考えています。特に幼児教育の分野で、いろいろな改革も行われています。

このドキュメンタリーの中でも、中国の高官は、「現状を変えなければならぬ。子どもの負担を軽減させなければならない」というコメントを発表したのですが、中国の現状から言えば、このような状況はなかなか改善されないのではないかと、私は予測しています。

●東西文化という視点から

これから、違う角度からこの問題をとらえてみようと思います。生態学や人類学の研究者のようにマクロな研究を行う人の立場から、この問題を考えてみましょう。それから、東西文化の教育の価値観の比較を通じて、なぜ中国ではそのような状況が起きたのかを説明してみたいと思います。

教育の問題は価値観の問題でもあると思います。西洋文化は、個人を強調して、民主、自由を何よりも大切だと考えています。しかし、中国は、集団が大切だと考えています。孔子の教えは今でも中国では深く浸透しています。中華文化の中では、道徳階級制度が最も大切に

思われているのです。今でも、階級意識や階級制度は、すべての中国人の心の中に深く根づいています。

ここ数年の努力で、中国社会でもいろんな変化が起きています。例えば上下関係は、昔は一方的な関係でしたが、今は双方向的になっているのです。しかし、そのように若干の変化はあっても、基本的なものは変わっていないと思います。

中国の家庭にもこのような意識は深く浸透しています。つまり、家庭の安定は、子どもの自主的な意思ではなくて、保護者の権威によって維持されています。部下が上司に従うことは、中国では忠誠心があることだと言われています。また、子どもが親に従うことは、親孝行と言われています。中国の社会は、まさにこの忠誠心と親孝行の意識によって維持されています。

西洋文化は個人を尊重して、個性の自由、個人の権利、機会の平等、選択の自由、道徳の自主的な形成などを提唱していますが、中華文化は全くその反対ですね。集団を尊び、家族の誉れ、社会における地位をととても重視します。

●価値観の根本にある「乖」

中国の親に対してどこに教育の重点を置いているかを、一つの文字で表してもらおうと、「乖（クワイ）」という文字が浮かびます。この字は「従う」「服従する」「親の言うことを聞く」「上の人の言うことを聞く」という意味です。この字は中国人の言論、行為に多大な影響を与えています。

たとえ西洋文化を深く受け入れている人でも、自分の子どもに関してはいつもそれを要求しています。例えば、私は西洋のものにいろいろ接触しているのですが、自分の子どもに対してはこれを強調しています。「言うことを聞け」ということです。

中国で今、教育改革が進められています。幼児教育においても、小中学校の教育改革においても、自主意識を育てることが強調されています。しかし、なかなかうまくいかない。というのは、この自主意識は中国の伝統的な文化の最も根本的なものと相反するものだからです。

私は子ども学会が主催する会議に出席したとき、ある講演に非常に興味を感じました。その講演者は、絵を掲げて、ドイツで経験したことをお話になりました。

ある子どもがおもちゃを集めています。そして、親が「このおもちゃはどこから来たの」と子どもに聞いたら、「お友達から買い取った」と答えたと言います。親が「なぜお友達からおもちゃを買ったの」と責めたら、「それは自分のことだ。あなたとは関係ない」と答えたということです。このような親子の会話はドイツでは当たり前だと思われると思いますが、もし中国で同じようなことがあったら、その子どもはしつけを受けていない、教養のない子どもだと思われそうです。

ですから、教育の問題を考えると、基本的な文化のことも考えなければならぬと思います。教育は文化の一部であるため、文化的アプローチで解決するしかないと思います。ですから、西洋のものをすべて取り入れる、システムを全部西洋的なものに変えることはあり得

ないと思います。それは必ず壁にぶつかって、うまくいかないと思います。

もちろん文化は単一的なものではありません。常にまじり合ったり移り変わったりしています。例えば、階級意識の強い中国の伝統的な文化の中でも、いろいろな変化が起きていますし、個人を重んじている西洋文化の中でもいろいろな変化が起きています。しかし、お互いに学び合うことはできても、完全に相手と同じになることは絶対ないと思います。

とても面白い絵をお見せします。ここには「水の存在を最後に知らされたのは魚である」とあります。我々は文化の中で生きていますが、自分の置かれている文化環境を往々にして忘れがちなのです。

●政治家と保護者の立場から

これからは政治家の角度からこの問題を考えてみたいと思います。私はいろいろなベテランの教育研究者とつき合うことがあるのですが、彼らは次のように私に言います。「我々は教育の問題についてたくさん研究を行いました。政治家は全然我々の意見に耳を傾けてはくれぬのです。彼らは自分の政治的目的に従って教育改革を行っているのです」と。それで、私は、それは当たり前だと彼らに言いました。政治家にとって一番重要なのは、社会の安定と国の競争力を高めることだからです。

例えば、アメリカでは早期段階における読み書き計算能力の強化という政策が打ち出されました。なぜそのような提唱がなされたのかと

いいますと、早い段階から読み書き計算能力の強化をすれば、たとえ貧しい家庭の子どもでも小学校では絶対に落ちこぼれない。また、中産階級出身の子どもたちと大体同じレベルの教育が受けられる。そうなれば、社会からの反発が弱まると政治家たちは考えたのです。

つまり、政治家たちは社会の対立を解消し、社会の安定を維持するという立場でこの教育の問題を考えているのです。彼らは決して一人ひとりの子どもの立場に立つて物事を考えるわけではありません。

それでは、保護者の立場に立つとどんなことを思うでしょうか。我々は『小皇帝の涙』を見ました。親たちの心のうちも聞きました。親としてはもちろん自分の子どもに小さい頃から苦労はさせたくないという気持ちがあります。でも、最終的にはスタートラインで差をつけられたくない、また今後のレースでも誰にも負けたくないにしたいという気持ちがあると思います。

●小皇帝の幸せを考える立場から

私は今まで4つの角度からこの『小皇帝の涙』を分析しましたが、私のメールには「小皇帝の立場でこの問題を見てもらえないか」という書き込みがありました。では、なぜ私は小皇帝の立場でこの問題を話してないのかといいますと、私も知らないからです。もちろん私は子どもたちに聞いてみたりすることはできるのですが、恐らく彼らは次のように答えるでしょう。「私は本当につらい。もう泣きたくない。遊びたい」と。でも、今の彼らの感想を知ることができて、将来彼らがどのように考えるかということはなかなかわからないのです。

おそらく彼らは今いっぱい遊んでしまえば、大きくなったらかえって親に文句を言うのではないかと思います。「なぜ私が子どものとき、もっと勉強するように言ってくれなかったのか。私はもう今、地位も低い。お金もない。そのような生活しかできない」と。

もちろん私は具体的な調査を行ったことにはないのですが、次のような対照的な事例があつて、このような考え方をもつようになったのです。

私のように教育や心理学の研究者の中には、自分の子どもを教育するときも西洋のやり方を取り入れていることが多いのです。しかし、彼らの子どもの多くは大きくなったら社会の競争の中で失敗しています。

その一方で、外ではこのようなやり方はよくない、もっと子どもたちを自由にさせたいというようなことを堂々と言っているが、自宅に帰ったら自分の子どもの前では全く違う行動をとり、とても厳しく勉強させている研究者も多いのです。そして、彼らの子どもには成功した人が多いですね。

きょうは5つの角度からこの問題について話しましたが、おそらく第6、第7の角度もあるのだと思います。違う角度からは、違う問題点が浮かび上がってくるかもしれません。ですから、私の話を聞いて、皆さまの間でもっといろいろな議論が生まれれば大変ありがたいと思います。ありがとうございました。

① 中国人から見た「小皇帝の涙」
② 発達認知神経科学と早期教育
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1…日本から見た「中国の子どもたちのいま」
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ
⑧ シンポジウム2…日中比較・子ども・発達・文化

発達認知神経科学と早期教育

秦 金亮

Qin Jintiang
浙江師範大学杭州幼児師範学院院长

子どもは何を学ぶべきか、何が学べるのか、いつ学ぶのか、どう教えるのが一番良いのか。これらは、全ての教育者が直面する最も基本的な問題であり、教育研究の永遠のテーマです。

また、どんな要素が子どもの発達に影響を与えるのかという問いは、発達心理学がずっと関心を注いできた問題です。近年、学問分野の垣根が取れ、子どもの発達は学問の枠を超えて研究されるようになりました。そして、学問分野の視野が広がる中、特に子どもの心理と行動の発達の神経メカニズムが最も重要な基点の一つとなっています。

子どもの発達の本質から見れば、教育の根本的な目的は、子どもの心理に調和の取れた発達を促すことにあります。心理の発達のバロメーターとは、バランスの取れた神経メカニズムの発達です。つまり、子どもの心理の変化は、全て神経メカニズムに根拠を見つけることができます。これが、発達認知神経科学が、子どもの発達研究において重視される理由です。

ここでは、発達認知神経科学の3つの理論、「成熟理論」「技能学習理論」「交互式特化理論」を重点的に紹介します。発達認知神経科学研究は、研究倫理の制約と研究技術レベルの制

限から、未だに子どもの心理発達のメカニズムを全面的に深く掘り下げ提示するには至っていないが、現在行なわれている早期教育に対して、以下の点を示してくれています。

1. 発達神経科学は、過去の「ブラックボックス理論」を改め、教育実践に堅実な科学的基礎を提供する。
2. 神経の発育・成長の可塑性は、早期教育の生涯教育における位置について科学的根拠を提供する。
3. 神経の発育成長の主な敏感期は幼児期にあるので、早期教育を重視しなければなら

らない。

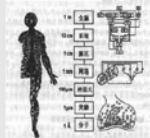
4. 神経の発育と脳の発育を促進するために、時期と内容のふさわしい教育環境を重視するべきである。

5. 発達異常の神経メカニズム研究は、早期特殊教育および神経回復のために科学的根拠を提供する。

発達認知神経科学は、まだ始まったばかりですが、その理論的立場や思考方式、技術手段において旺盛な学問分野的生命力をしっかりと築いています。将来必ず、小児科学臨床的実践、早期教育の実践、子どもの社会的福祉、子どもの看護のために、確実な科学的根拠と新しい発達理念をもたらしてくれるに違いありません。

発達認知神経科学の学問分野的位置

認知科学(Cognitive science)は、知能の実体とその環境との相互作用の原理を研究する科学である。
知能の実体とは人類や動物、知能機体の総称である。
人間の知能研究には認知心理学と言語心理学がある；
動物の知能研究には動物心理学と比較心理学がある；
機器機能の研究には計算機科学があり、特に人工知能学と人工神経ネットワークというものがある。



一、発達認知神経科学の確立を示すもの

発達認知神経科学の概念は、アメリカの研究者ネルソン(Nelson)が『子どもの発達と神経科学』という論文の中で提出したものである。2000年、ネルソン主編による第一冊めの『発達認知神経科学手冊』(《Handbook of Developmental Cognitive Neuroscience》)が作られ、それが発達認知神経科学確立を示すものだと見なされている。このハンドブックが出版されるとすぐに、1984年のMillerとGazzaniga編『認知神経科学手冊』に匹敵する画期的書物であると称賛された。

ネルソンの『発達認知神経科学手冊』は、全部で8つの部分から構成されている：

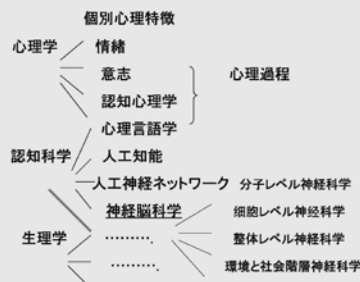
- (1) 発達神経生物学の基礎；
- (2) 発達認知神経科学の研究方法；
- (3) 発達神経の可塑性；
- (4) 感覚と感覚運動システム；
- (5) 言語；
- (6) 認知；
- (7) 障害神経の発達の臨床；
- (8) 情緒と認知の相互作用。

五、発達認知神経科学研究の乳幼児教育への示唆



教育研究が脳科学と認知神経科学の基礎の上に築かれるべきならば、子どもの早期教育は、発達認知神経科学の基礎の上に築かれるべきだと言えよう。

二、発達認知神経科学の出発点



① 中国人から見た「小皇帝の涙」
② 発達認知神経科学と早期教育
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1…日本から見た「中国の子どものいま」
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ
⑧ シンポジウム2…日中比較「子ども」・発達・文化

幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

黄紹文

Huang Shaowen
長沙師範専科学校副教授

本校（中国湖南省長沙師範専科学校）の幼稚園教諭を育成するプログラムや実践を中心に、ご報告を申し上げます。

1. 市場のニーズに合わせて、養成目標を明確にする

専攻を幼稚園教諭の職業に緊密に結びつけることで、幼稚園教諭の組織と一緒に幼稚園教諭市場の変化や動向を分析し、「子どもを愛すること、しっかりとした基礎、適用できる理論、熟練した技能、高い指導・教育能力」という養成目標を掲げた。

2. 人材養成のための環境を作り出す

理論と実践の両面の能力を併せもつ教師陣の養成、実習場の整備（数・規模・機能において）、といった幼児教育の土台固めができる環境を作る。——写真①

3. 多彩豊富な職業能力養成課程を提供する

専門必修課程には、幼児教育の教師教養学・歌・演奏・踊りの演出と創作・幼稚園の環境設計などがあり、専門選択科目には、囲碁・チェス・オルフシステム・感覚統合訓練法・モンテッソーリ法・保育士研修などがある。

——写真②

4. 課程の特徴に合わせて教授法を研究する

それぞれの課程には異なる教授法がある。専門理論科の授業では毎年、幼稚園での実践を通し、幼稚園が解決すべき問題を盛り込んだ教案を編成し、理論研究、幼稚園の事例分析、操作練習の方式で教授している。具体的にはまず、学生に理論をマスターさせて、実践を指導し、理論研究によって問題解決に取り組む。芸術課程では体験式教授法を採用し、声や表現に感情を込めることなど学生に体験させ、比較的短い時間で、学生に仕事の技能を身につけさせている。——写真③

5. 産・学・研が結びつき、学生の職業能力を育成する

① 幼稚園との学前教育専門人材育成共同研究法案。② 幼稚園との幼稚園課程の教材と教授法の共同研究。③ 幼稚園と共同で進める幼稚園関連書の研究。④ 幼稚園と協力して「理論と実践両面の能力を併せもつ」教師の養成。——写真④

6. 学内外が結びついた授業の質的評価システムを作る

学生の職業技能と芸術技能の級別審査制度を設け、学生が到達すべき最低基準を規定し、学生は自分の学習進度に応じて、自由に各等級の審査を受けることができる。同時に、卒業生の追跡制度をつくり、毎年実習先の幼稚園や校友会を通して、卒業生の状況を調査し、時期に応じてカリキュラムと授業内容を調整している。



① 保育現場の様子をハーフミラーで観察。



② 幼児教育における踊りの授業



③ 声や表情に感情を込めるレッスン



④ 学術シンポジウムの開催

- ① 中国人から見た「小皇帝の涙」
② 発達認知神経科学と早期教育
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

- ④ シンポジウム1…日本から見た「中国の子どもたちのいま」
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

- ⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ
⑧ シンポジウム2…日中比較「子」も・発達・文化

シンポジウム1

日本から見た

「中国の子どもたちいま」

●司会……朱 家雄・榊原洋一

●シンポジスト(中国側)……秦 金亮・黄 紹文

●シンポジスト(日本側)……内田伸子・一色伸夫・山本登志哉・一見真理子

【朱家雄氏の講演について】

内田伸子

「各国の文化、社会、家庭、経済状況などによって、保育原理や教育原理の実現の仕方が異なり、文化という枠の中には絶対には同様に同じ形で模倣できないという指摘はその通りだと思います」

「小皇帝たちが、『なぜもっと勉強させるような働きかけをしなかったのだ。そのために自分は社会的地位もなく、貧しい生活をしながらない』と、将来親たちを非難する可能性もあるとい

う話にはハッとさせられました」

「やはりどうしても気になるのは、子どもへの見方がすべて成績だけ、学校の勉強だけになり、人格的なものや独創性のようなものをすべて度外視した生活の中で、広い視野、文明性といったようなものをきちんと育てていけるのか、ということです。成績という唯一一つの物差しで計ってしまえば、その子もっている他の才能に気づくこともない。そのことの損失はとても大きいと思います」

山本登志哉

「中国の教育も、先生中心から子ども中心へとすぐ変わってきています。しかし、ちよつとした先生と生徒の会話を聞くと、日本とは驚くほど違った内容になります。やはり文化の影響力のすごさを感じます」

「日本と中国のもつとも大きな違いは、競争の厳しさだと思います。日本では小中学生に競争社会の厳しさを露骨に示すことはしませんが、中国では社会の厳しさをダイレクトにどんどん見せています。そこで知りたくなるのは、これほど厳しい中国社会の中での人々の団結心というのは、どのようなにはぐくまれるのかです」

一見真理子

「日本では集団の圧力の中で、出る釘は打たれるといって、自己主張はできるだけ自己規制するものとなってしまう。しかし、中国では、打たれば、打たれるほど釘が出てきます。子どもたちは厳しくされると、もっと自分を主張していく。その感じをビデオで知ることができたのはよかったと思います」

「私は評価基準(成功と失敗の基準など)を多元的に、豊かにすべきと思います。この番組で取り上げた家庭の場合は親御さんが、市場経済化す

る中国の中でリストラされていたり、自営業で苦
労されているなど、その家庭の経済的な焦りが出
ていると感じました」

「いま中国では資質教育が掲げられています。
中国の文化の中で変えられない部分があるという
マクロな見方を朱先生が提示してくださいました
が、そのような中でも変化するものはあると思っ
ます」

一色伸夫

「朱先生は国や文化で価値観が違うという興味
深い話を聞かせてくださいました。しかし、これ
からの世界をもっと幸せなものにするためには、
その違う部分をどう融合させていくのかについて
も考えていかなければならないのではないでしょ
うか」

「中国の子どもたち（小皇帝）の番組から、子
どもたちは非常に厳しい状況下（勉強の負担、心
の問題、強度のストレスなど）にあることが読み
取れました。その背景には両親の我が子への思い、
子どもの将来を思う親の熱意があります。この熱
意の具体的な形は中国と日本で違っても変わらな
いのです。私はこの点を大切にしたいと思います。
かつて日本では社会問題として『教育ママ』とい
うのがありました。教育ママは受験という戦場に、
子どもたちを戦士として送り出すと非難されてま
したが、私は親の子どもに対する熱意を強く感じま

した。人間が次の世代を育ていくのに一番大切
なことだと思います。」

「この親の子どもへの熱意をベースに、文化、
世代、国家の違いを超えて子どもが豊かに育つ／
育てるとはどういうことか、多様な視点で子ども
をとらえる子ども学を出発点として両国が協力作
って考えていくことが大切です」



初日のシンポジウムでは、
日本側の4人のシンポジストから
中国の研究者の発表に対する
感想や質問が述べられました。

【秦金亮氏の講演について】

内田伸子

「先生のご専門は発達神経科学でして、それを
踏まえて幼児教育を行い、神経科学の視点で子ど
もたちの発達を考える必要性については、私も賛
同いたします。ただ、ここで気になりますのは、
神経科学は血管の中に流れる結晶を見るといっ
非常にミクロなレベルで対象を分析していること
です。しかし、発達心理学あるいは行動科学では
全体を見るだけではなく、成育環境、対人関係、
社会構造、文化のようなマクロなものを見るわけ
です。ですから、神経科学と発達心理学などのも
のの見方の乖離、ギャップをどう埋めていくのか
が気になります」

【黄紹文氏の講演について】

内田伸子

「実験自習機構を併設されて、ヘッドホンを付けて、保育のどのコーナーで何が起ったかをハーフミラーから観察できる施設があることは、うらやましく思いました」

「産・学共同の観点から、教員育成校と各地の幼稚園との緊密な連携が行われ、実践畑の方と理論を考える学校レベルの方が一体となって総合教育が行われていることに対して、大変敬意の念をいだきました」

「卒業生の追跡調査をされているということでした。これは質を担保するために、卒業生がどういうふう to 成長しているかを確かめるためかと思いますが、できれば学校の教育システムの評価にもぜひ活かしてほしいと思います」

一色伸夫

「黄先生は幼稚園では子どもたちの目はみな輝いているとおっしゃいましたが、その元気な子どもたちが小学校に入ると、勉強の辛さに涙すると思う、このギャップをどう考えたらいいのかと思いました」

【質問へのコメント】

朱 家雄

「中国の教育問題は基礎の段階で如何に学力を向上するのかわけなく、教育を受ける機会を平等にするところにあります。国家政策の最終的目標はごく一部の富裕層のためのものではなく、多くの庶民のためでなければならぬのです」

「我々中国人も子どもたちを苦勞させたくなのですが、日本と違つて学歴がなくてもなんとかやっていける状況ではなく、学歴がなければ一生厳しい環境に晒されます。中国の経済は日本と比べ物にならないので、教育問題を考える時に、この前提を無視して論じることができないです」

秦 金亮

「我々教育学者、ソーシャルワーカーにとつて、もちろん勉強に追われて涙を流した子どもたちも注目しなければならぬですが、貧しさのために親に捨てられて、孤児となる子どもたちにもっと注意を向けるべきではないでしょうか。親に捨て

られて、一人で苦しみを噛み締める子どもたちは、ドキュメンタリーに出てきた子どもたちよりも遙かに不幸です。しかし、中国の農村で捨てられた子どもでもおそらくアフリカの子どもたちよりも幸せではないかと思ひます。少なくとも、彼らは食べ物もあるし、着るものもあります。要するに、幸せというものは相対的なもので、絶対的なものではないということです」

黄 紹文

「会場から、中国の幼児教育についての質問がありました。中国では公立と私立の幼稚園と保育園があり、全日制のもあれば半日、定時制また寄宿制もあります」

「幼児教育に携わる教育者の社会的地位についてですが、仕事が大変の上、給料は安く、社会的地位もそう高くありません。幼児教育にかかわる男性教育者は、幼児園、託児所ともにいますが、絶対数は多くありません」

① 中国人から見た「小皇帝の涙」
発達認知神経科学と早期教育
幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1・日本から見た「中国の子どものいま」
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
⑥ 日中の子どもの観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ
⑧ シンポジウム2・日中比較子ども・発達・文化

日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」

山本登志哉

Yamamoto Toshiya
早稲田大学教授

●文化が与える制約

最初に少しお話をして、それからビデオを見ていただきたいと思います。なぜ、文化を無視した形で人間を理解することが不可能なのか、あるいは文化というものがなしで人間が存在することが不可能なのかということについて、私はあまり理論的なことを多くお話するつもりはありません。具体的な事例を通して、私が実感したことを皆さんに少しでも感じていただけたらと思います。

最近、朱家雄先生が編集された『中国の視野のもとにおける幼児教育』という、就学前教育の本が出版されています。これを拝見すると、きょうのテーマの重要なポイントに当たることを書いていらっしゃると思います。その部分を最初に紹介したいと思います。

「幼稚園での教育実践において、私はその度ごとに、中国の幼稚園

で私が見る教育の情景、先生と子どもの状況、保護者の期待そしてそれらに関するすべてのことが、私たちが西側のいくつかの国で見たこととは異なるものだ気づいた。私はその背後に、何とも茫漠としているにもかかわらず、取り去りがたいある力が、幼稚園教育の中で生ずるすべてに制約を与えていて、そのような内在的な力がしばしば外部から加えられる力を無力化してしまうということをかすかに感じとった。この発見によって、それが文化というものであり、文化は重層的な生態関係を通して就学前教育の実践に影響し、制約を与えているということに私は少しずつ気づかされたのである」。

朱家雄先生のご見解に私はとても共感するところが多くあります。現在、心理学などでも質的な研究が大きなテーマになっています。量的に分析するにとどまらず、人間の意味の世界に入っていくような、その質的な研究の重要性が言われています。

昨日の朱家雄先生のご発表の最後のところで、「水の存在を最後に知らされたのは魚である」ということをおっしゃいました。自分が生きている環境というのは、自分ではなかなか気がつかないのですね。例えば、自分が日本であるということをご皆さんはどこまで日々感じているのでしょうか。

●中国の子どもたちへの違和感

さて、早速、皆さんにも少し体験をしていただくということで、中国北京市の幼児の様子をごらんいただきたいと思います。92年から中国に行き始めて、93年に本格的に比較研究を実施し始めたときに、北京師範大学の先生にいろいろお世話になって、たくさんのお教育機関を参観させていただきました。そこでビデオをたくさん撮りました。その中の一つの様子をご皆さんにごらんいただきたいと思います。

(ビデオ視聴)

幼児教育に携わっている方も少なからずいらっしゃると思うのですが、皆さんの3歳児のイメージと、今、ここで見ていただいた3歳児のイメージとは、どう違うのでしょうか。入園してです。1週間と経っていない感じの授業ですね。

私は、当時、信じられなかったですね。一日じゅう、朝からずうっと子どもたちが寝るまで観察させていたいたのですが、このビデオに登場された先生に「いやあ、すごいですね、みんな」と言ったら、

「いや、お恥ずかしいです。まだ、入ったばかりで何もできないので」とおっしゃったので、「ええっ！これで行けるようになったら、どうなるの」と、私はびっくりしてしまいました。

さて、後日これを見て、日本の先生たちがどんなふうに驚いたでしょうか。

「なに、この子たち、ちゃんと座ってるじゃない！」「ひとつひとつの生活動作がとてもゆつたりと、しっかりとできている！」「まるで5歳児のよう！」と大騒ぎです。5歳児でもできないかもしれないと、びっくりしていました。

学生などにも見てもらったのですが、やはり違和感を抱くようでした。「なんか、子どもらしくない」「子どもは、もっと伸び伸びと、好き勝手に動いて、そもそも統率がとれないものだ。それこそが子どもだ」と言うんですね。「これは、まるで子どもでないみたいだ」「統制されていて軍隊みたい」「抑圧されていて、すべて指示で動き、これでは個性も自己主張も育たないのでは？」というような感想をもつようです。

●統制された教育が生む強い個性

日本の先生が幼稚園の現場でどういうことを大事にしているかといえますと、私の理解ですが、「子どもの目線の高さに立つ」「そして大人は『正解』を押しつけず、子ども自身に答えを見つけさせ、または子どもたち自身で解決させる」「そのため自分の気持ちを言葉で言わせ、また相手の気持ちも理解するように仕向ける」——そういうこと

だと思っています。しかし、そういう考え方で、今のさまざまな場面を理解しようとする、ちよつと矛盾に突き当たることに気がつきます。

何かというと、まず、日本的な感覚で考えれば、次のような図式が成立するはずです。抑圧・統制された集団教育で、個性と自主性が否定されると、自己主張をしない没個性的な人間が生まれてしまう。

さて、皆さんの中に、中国の留学生とおつき合いがある方、ないしは中国人とおつき合いのある方がどの程度いらつしやるかわかりませんが、私の感覚からすると、「自己主張できない。個性がない」などということは信じられません。ものすごく自己主張が強いし、すごく個性的です。

よく見ると、ビデオの子どもたちは、結構、マイペースで動いています。さらに自己主張をかなりしつかりしているのです。一方、子どもたちの自主性みたいなことをすごく大事に育てられている日本の子どもたちはどうかというと、中国の子どもたちと比べると、自己主張はずつと弱いです。強い個性が育っているなどとはとても言えない。ということは、先ほどの理解の仕方では解釈できない問題がそこにあるということです。この矛盾をどう解いたらいいのでしょうか。

● 日中の性善説の違い

中国の場合、とても強く感じるのですが、先生はモデルでなければいけない、模範を示さなければならないという考え方がとても強い。一方、日本の場合は、そうではないと感じるのですね。往々にして、むしろ子どもがモデルになっています。

幼児教育に当たっていらつしやる方は、結構、こういう感覚を共有しておられるのではないのでしょうか。「子どもの純真な心に比べて、私はなんて汚れてしまっているんだろう」と。私もそういうところがあります。そこを起点にいろいろ物を考えるという感じですね。こういう考え方が、割合、感覚的に強いような気がします。すべての人がそうだとは言いませんが。

少なくとも江戸時代ぐらいから、日本の教育の仕方や姿勢は中国とは違うように私には感じられて仕方がありません。そして、日本の性善説と中国の性善説とはずいぶん違うことに、あるとき気がつきました。

これは、江戸時代の子育てを研究された山住先生が言われていることの一つですが、日本の子育て観は木、樹木をすくすく育てるようなイメージをもっていた、ということです。あまり、変に外から手を加えてはいけないんだという児童観なり育児観が、いろんなところで見られます。

ところが、この性善説で理解しようすると、中国のことがわからなくなってしまう。小さいころから本当に鍛えますから。「何であそこまで、手をかけるの？ 子どもがつぶれちゃうんじゃない？」と僕は感じてしまいます。でも、考えてみると、「性善説」というのは、もともとは、日本ではなくて中国のもの、孟子のものなんです。訳がわからなくなったのですが、これを見たときに、「あ、そうなんだ」と、一挙に疑問が解きました。

これは、『三字経』という、宋の時代に成立した中国の初等教科書

です。3つの字を重ねることによって繰り返して中国の儒教思想の基本的な考え方や歴史の問題とか、関係する逸話なんかを紹介するものです。子どもたちは、まずこれを暗記するところから勉強を始めたわけですね。

日本の「性善説」と 中国の性善説

- 日本：
子どもはもともとすばらしいものだから、その性質がそのまま育つことが大事。汚れた大人がへんに手をかけてはならない。
- 中国
人之初、性本善。性相近、習相遠。
苟不教、性之遷。……
養不教、父之過。教不嚴、師之情。
(三字経の冒頭の一部)

最初の言葉ですが、「人之初、性本善」、まあ、性善説です。「性相近」、人間の性質はもともと生まれたときにはお互いにみんな同じようなものだと。ところが、「習相遠」、その後、いろんなことを経験することによって、学ぶことによって、外からの影響を受けることによって、お互い、本性はどんどん変わっていつてしまう。「苟不教」、もし教えることがなければ、「性之遷」、その人間の本性はどんどん移り変わってしまふ。移り変わる方向は、悪い方向にということです。

少し飛ばしますが、「養不教」、つまり、子どもに御飯をあげたり、服を着せたりして成長を助けるのだが、教育をしなければ、それは「父之過」、父親の過ちである。「教不嚴、師之情」、教えるときに厳しくなければ、それは先生が怠けていることだ。

つまり、中国の性善説は良い可能性をもつものを悪くしないよう徹底して鍛えるというもので、日本の性善説は良いのだからできるだけ手を加えずにと、全然逆方向の理解なのです。

それぞれ、さまざまな文化を知ること自身が自分を豊かにすることだ。そういう過程が本当にお互いに大事になっています。「再発見」も、他者を通して再発見することがとても大事になっていると思います。それは昨日、朱先生がおっしゃったことと全く同じことではないかと勝手に想像していますが、朱先生の教育のあり方を日本の状況にちよつと当てはめて、こんなことが言えるかなと思います、きょうはお話をさせていただきます。

① 中国人から見た「小皇帝の涙」
② 発達認知神経科学と早期教育
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1…日本から見た「中国の子どものいま」
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
⑥ 日中比較の子どもの観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ
⑧ シンポジウム2…日中比較子ども・発達・文化

日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

首藤美香子

Suto Mikako

白梅学園大学准教授

私たちの子ども観・発達観・教育観は、社会・文化のなかで形成され、歴史的に変容するものです。今回は、中国の子ども観・発達観・教育観がどのようなものであったか、伝統小児医学、科挙制度、儒教思想や芸術など、さまざまな資料から考察してみたいと思います。

まず、単純な進歩史観への異議申し立てにより、巨視的な比較史の可能性が示唆されます。そのことにより、欧米とは異なる子ども観の歴史の多様性、可変性、相対性を描写することが可能になります。

また、子どもの上に交錯する複数の視線に注目することで、史料的な制約を克服し、「子ども主体の歴史」を追究することが可能になり、「子ども」と「大人」のインターアクティブな関係性の解明へとつながることができそうです。

さらに、「子どもの発見」といわれる近代のまなざしが、子どもの生自体に意味するものは何であるかを改めて省察することで、近代の

子ども観、発達観、教育観を脱構築することができます。

一方で、課題としては、歴史的な転換期の時期が不特定であること、構造的変化の過程が不明瞭であること、「子ども」「親」「教育」「家庭」等の用語と概念そのものの歴史的検証が不十分であることなどが挙げられます。また、史実の多様性と解釈の多様性が混在していて、特定の主題の解明に終始するだけで、不整合や矛盾が多く、そのために全体像の把握が困難になっていることも大きな課題と言えるでしょう。

(1) 中国の子ども概念「子」「童」「幼」

「子」は生物的にみて、人生最初の時期。「童」は年長者に対する社会的身分。「幼」は徳や純粹無垢の質を体現したものです。

(2) 伝統小児医学による子どもの発達観と陰陽五行論「変蒸」

中国には、隋・唐の時代から始まる小児医学の伝統が、大人の医学とは別に存在し、宇宙論である陰陽五行論を基礎に発展しました。

「変蒸」とは、乳幼児の成長発達と生理を宇宙論の数字で定量化・調和的で等価の陰陽の段階を表します。

(3) 科挙制度における子どもの教育／早期からの知識教育重視／

もともと儒教においては日常生活の行為規範の習得が第一義であって、識字・読書はある程度年齢が上の余裕のある場合のみとされていましたが、科挙制度に対する対策として、早期からの知識重視が求められるようになりました。時代を経るにつれて、学習が低年齢化し、家長や親が一致団結して直接子どもの指導責任を負うようになっていきました。

(4) 儒教の遊びに対する対照的な見解／朱子学VS陽明学／

宋の時代に成立した新儒教である朱子学では、人間の生理的肉体的な欲望を否定して、理性の成熟を求め、遊びの禁欲という形で、子ども観にも影響を与えました。一方で、朱子学を批判する形で登場した陽明学は、認識と実践の統一を重んじ、「心身愉快」「快樂」を学習意欲を引き出す主動因と考え、童心を賛美し、子どもの無垢性を保護しました。

(5) 遊ぶ子どもの主題化（芸術）

「遊び」は朱子学と陽明学の争点のひとつですが、中国の歴史的な芸術作品を見ると、豊かな子どもの遊びの世界が展開しています。作品のカテゴリーとしては、芸術美を追求したもの、子孫繁栄・五穀豊穡の象徴として類型化されたものの、愛着と共感の対象として「騒がしい」子どもの生態を描写したものなどがあります。



こうした中国の子ども観の歴史を探索する試みは、子どもを「教育と保護の対象とみなす近代的な子ども観」の脱構築につながるだけでなく、欧米とは異なる「アジアの子ども観」を鮮明にしていくなかで有意義であろうと思います。また、中国から大きな影響を受けてきた日本の子ども観と比較し、日本の子ども観の独自性や固有性を再発見していく契機ともなるのではないのでしょうか。さらには、現代中国における子どもの処遇（一人っ子政策とその影響）の特質と課題を歴史的な文脈の中で再検討する可能性も秘めていると言えます。

子ども観・発達観・教育観へのアプローチが、子どもの成長発達と生活環境のあり方を相対的に検証しようとする「子ども学」の一つとなり、日中双方が、子どもの具体的な生き様を包括的に理解し、新しい子ども——大人関係の気づき（築き）となることを願っています。

① 中国人から見た「小皇帝の涙」
発達認知神経科学と早期教育
幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

② シンポジウム1・日本から見た「中国の子どものいま」
日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
③ 日中の子どもと親・発達観・教育観へのアプローチ

④ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ
シンポジウム2・日中比較子ども・発達・文化

幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ ―うかびあがる諸問題―

一見真理子

Ichimi Mariko

国立教育政策研究所 総括研究官

◎ 幼児教育における日中関係の 出発点

私はこれからここ100年間の日本と中国の幼児教育上の関わりということで3つの時点にできるだけ集中してお話をさせていたいただきたいと思います。そして、そこから浮かび上がってくる問題点をとりあげてみます。

2003年、中華人民共和国の北京市では「中国の幼児教育百周年」の盛大な祝賀行事がとり行われました。それに合わせて立派な『中国の幼児教育の百年間（原題…百年中国幼教（1903・2003）』という書物が

記念出版されています。ここからわかりますが、中国では、1903年を近代幼児教育の出発点ととらえています。第1の日中の関わりは、近代幼児教育の出発点にあります。

中国で最初に幼稚園制度を導入したのは、清朝政府の高官で当時湖広総督であった張之洞という人物です。日本では在野の福沢諭吉が書いた『学問のすゝめ』にあたる『勸学篇』という書を著し、その中でぜひ「日本へ留学しなさい」と述べています。なぜなら同じ漢字文化圏で儒教圏にある日本が先行して摂取した制度や方法を学べば、はるばる欧米まで

行かなくても用が足るからで、当時の中国では、近代化をいかに急いでいたかがわかります。実際、この時期の留学ブーム以前に、官僚から民間人までかなり多くの中国人が日本視察にやってきました、見聞したことを『東遊日記』という形で発表しています。そのひとり、羅振玉という中国最初の教育ジャーナリストは、当時東京の女子高等師範付属幼稚園で展開していたフレイベルの恩物を使った保育に注目しています。彼は自分が編集する『教育世界』という雑誌や『教育叢書』というシリーズで、お茶の水幼稚園の関信三がアメリカのカタログから日本向けにまとめたおした

恩物保育の図説『幼稚園法二十遊嬉』を、とくに中国化することなくそのまま載せて紹介しています。

一方、『勸学篇』の張之洞は、膝元で実際に幼稚園を開くことにし、『湖北幼稚園開弁章程』という、幼稚園の開設目的や運営方法に関する指針をまとめます。それが出たのが1903年なので、中国の近代幼児教育の歴史はここを起点にしているのです。今日のお茶大と中国の幼児教育の関わりには更に深いものがありました。張之洞は幼稚園を一から始めるために日本から女高師の卒業生である戸野美知恵以下3名の女性を招いています。海をわたって中国の奥地にまで赴き、幼児教育と女子教育をリードした女性は戸野らのほかにも何十人もいまして、その献身ぶりは現地の信頼を獲得しており、日本人としてこの史実を知って誇らしく思うのは私だけではないと思います。ちなみに、日本人女子教習の活躍は、明治日本の教育雑誌でかなり詳しく伝えられています（『近代日本のアジア教育認識・資料篇（中国の部）』・明治後期教育雑誌所収中国・韓国・台湾関係記事）龍溪書舎

2002を参照）。

●日本の倉橋惣三と中国の陳鶴琴

ここで第2の接点に入る前に、日中の幼児教育関係史上、直接の関わりはなかったのですが、ぜひ比較を試みたらよいのではないかと二人の人物をあげておきます。日本の倉橋惣三と中国の陳鶴琴です。陳の方が10歳若いのですが、ほぼ同時代を生きた人だと言っていると思います。どちらもそれぞれの国のフレイベルと呼ばれ、しかも形骸化した恩物保育を乗り越えようとしています。バックグラウンドに心理学があって、それぞれの基地の実験幼稚園で実践を行い、多くの保育者を育て、現場と一体となった研究組織を作り、今日に繋がるような活動を展開しているところも共通します。2人とも子どもが大好きでよく遊んだところも似ています。ですが、実際に行った保育はというと、かなり持ち味というか風合いというか、どこか違うように思えてなりません。ここで詳しくは述べませんが、その違いはどのようなものか、なぜなのかをとともに考えてみるのは、今回のシンポ

ジウムのテーマに照らして大変興味深いことではないでしょうか。また、たとえば、倉橋惣三の系統的保育案ないしは誘導保育案、それから陳鶴琴の行ったプロジェクトメソッドの比較に日中双方でいちど本格的に取り組んでみることにしても、ここお茶の水女子大学で講演する貴重な機会をいただきましたので、ご提案しておきたいと思います。

●「紅いゆりかご」と寄宿制保育

それでは、日中幼児教育の関わりの第2点として、日本が中国にしかけた戦争が残した影響についてお話したいと思います。これは、中国でなぜ世界でもまれに見る寄宿制保育が誕生したのかのいきさつをお話することになります。

1930年代の中国では国民党政府と奥地に勢力を張る中国共産党政府が対立し内戦の状態にありました。そこに日本の侵攻があります。国共内戦の時代には逮捕され処刑されたり、戦場で命を落したりした革命家が少なからずありました。その遺児たちを残った者は間違いなく育てあげること、彼らの犠

犠を無駄にすまいとしました。それはまた革命のために後顧の憂いを残さない意味もありました。もちろん親代わりになった人たちも革命のために日夜活動していますので、こうした子どもたちを全面的に機関が保育する必要性があり、当時、根拠地の延安市には、寄宿制の保育院や小中学生の年齢まで預かる保育学校がありました。

また、日本の歴史教科書にはほとんど書かれていないのですが、日本軍の侵攻は当時国民政府のあった重慶市にまで及び大空襲による大変な被害が出ています。このとき超党派の女性による抗日統一戦線が動き始め、戦災孤児の救済と保育にも乗り出して、各地に保育院がつくられるようになります。これらも当然のことながら寄宿制です。私自身は寄宿制保育のある中国は、女性の自立を応援していると思うて研究をはじめたのですが、このいきさつを知るにつけ日本人としてはとても複雑ないたたまれない気持ちになり、またこのように子どもの利益を最優先して戦争の悲劇を乗り越えた中国女性の気概に感服してきた次第です。今日も存続する寄宿制保育の大

もとは革命と戦争の困難な時代にあったわけで、これらは今、中国では「紅い（革命の）ゆりかご」と言われています。

● 日中幼児教育界の交流とその中でうかび上がってきた諸問題

さて、第3の関わりですが、1980年代以降今日までをざっと見ることにします。日本と中華人民共和国は長いこと正式の国交がありませんでしたが、国交が正常化したのが1972年、当時中国はまだ文化大革命の最中でした。78年に平和友好条約が結ばれ、その後の「改革・開放」路線の中国とは、文字通り人的交流が年を追うごとに盛んになっています。時間の関係で、日中幼児教育界の交流にどんな局面があるのかだけ、簡単に話したいと思います。

まず研究面に目をむけますと、日本保育学会と中国就学前教育学会の交流があります。OMEP（世界幼児教育機構）中国委員会では、日本との交流を積極的に行っていました。研究者の個々のレベルでは、例えば国際会議

参加や視察旅行を通じて、双方向で顔の見える交流を重ねてから、それぞれの在外研究や科研費共同研究などで一定期間、もっと腰をすえた研究活動を進める動きが出てまいりました。

それから、就学前機関同士でも交流があります。日本の幼稚園と中国の幼児園がさまざまに友好協定を結んでいて、熱心なところですと先生たちの行き来であるとか、また子どもたちの作品の交流であるとか、そうした関係を持っています。

中国教育界では、市場経済化（あるいはプライバタイゼーション）が90年代の半ばにぐんと進み、それまでは公立か国营企業立、地域の集団立の園しかなかったところに、さまざまな私立幼稚園ができるようになりました。当時「日本出資の私立幼稚園を中国につくりませんか」という話が日本の幼稚園業界にもちかけられることがありました。ただし日本の私立園は、学校法人で営利活動は認められません。ですので、東京の私立幼稚園の園長グループが、大型の出資をしない代わりに中国と対等の関係を結びながら「日中友好

園」という形で中身をつくり上げる交流を提案し、実践した例があります。その園は交流を通じて自らの課題のひとつを地域の乳幼児と保護者への保育サービスを充実させることに置き、その先進的な成果が表彰されて、喜びを日中で分かち合うひとこまもありました。

留学交流についても、最初の中国人留学生さんたちは、来日して25年以上の時間がたっていますので、日本に足場を築くか、帰国して指導的な立場にあります。国交回復後の留学交流の成果が更に現れるのはこれからです。実例を申ししましょう。中国で2001年に出た『幼児園教育指導要綱』は、子どもの遊ぶ権利や主体性を重視する画期的な内容ですが、その起草にも日本留学から帰国した専門家たちも入っていて、実際目に見えないところで日本の幼児教育のよいところも取り入れられていたりすることがよくあります。

最後に、共同研究の中から見えつつある問題ということで、後の討論につながる問題点を申します。まず第1に、親のわが子に対する期待や就学前機関に対する期待が日中でか

なり違うという点。第2に、「遊び」と「学び」の関係が日中間で似ているようでいて大分違う、ということ。この2つと関連して、生涯発達をとげるための幼児期の在り方への考え方も大事だと意識する点で共通なのですが、方向性が異なるように思います。

第3に、同じ漢字圏ですが、「保育」、「早期教育」、「科学」などの言葉の意味する内容にやはり日中で相当のずれがあります。「子ども学」のよい中国語での訳語はなにか、これもずっと前からの宿題です。

それから、第4にここ十年以上気になっていることを申しますと、中国でも特別な支援の必要な子どもや、ストレスをため込み心身の症状に現われている子どもがやはり相当増えていて、この問題も日中共同で、しっかりと組上に載せた方がいだろうと考えます。

日中の幅広い子ども学関係者が、経験を交流し研究課題を探る場が継続してあるべきで、このような子ども学交流の機会は積み重ねることが大変大事なのではないかと感じます。日中の幼児期をめぐる関係を見つめてきた者として、期待したいと思います。

シンポジウム2

日中比較

「子ども・発達・文化」

- 司会……内田伸子・秦 金亮
●シンポジスト 中国側……朱 家雄・黄 紹文
●シンポジスト 日本側……榎原洋一・山本登志哉・一見真理子・首藤美香子

- ① 中国人から見た「小皇帝の涙」
② 発達認知神経科学と早期教育
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

- ④ シンポジウム1・日本から見た「中国の子どもたちのいま」
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

- ⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ
⑧ シンポジウム2…日中比較―子ども・発達・文化

朱 家雄

「首藤先生のご報告を聞いて、いろいろと考えさせられました。中国の宋・明・清の時代の哲学の視点に立つて子ども学、子どもの問題、教育の問題を考えるのは、非常に有意義だと思います。」

「首藤先生が中国の儒教思想が東洋文化および日本文化に影響を与えたとおっしゃいました。一方で、近年の中国の教育改革では日本の教育や日本の発展が、子どもの問題をめぐる考え方

に大きく影響を与えています。現在、中国で出された教育関連の報告はほとんど日本のコピーのようなものです。日本の教育や文化の発展には中国の影響が色濃くあるのに、現在の中国の教育改革には自分たちの文化を否定するような動きが見られます」

「山本先生の発表で日本は昔、大量の中国文化を受け入れていたとおっしゃっていました。しかし、明治維新以降、中国の文化を放棄し、西洋文明を受け入れるようになりました。日本人

が文化的アイデンティティの危機にさらされていたのではないかと私は思います。この危機は、具体的に何なのかを知りたいです」

「一見先生は発表の中で二人の重要な人物を取り上げました。日本の倉橋惣三先生と中国の陳鶴琴先生です。お二人の素晴らしいところは西洋の考え方をそれぞれ、中国や日本の文化に合わせて、中国や日本に適用するものに変えたところにあると言われています。彼らが進めてきた実践的教育法は、元々は西洋のものであると言われています。しかし、私は最近あることがきっかけでこの考えを変えました。陳鶴琴先生の関係者が彼の教育思想は中国人の立場や文化を考量した上で考案されたオリジナルなものであって、決して西洋のものを中国風にアレンジしたものではないと考えているからです。私は日本でも同じような問題があるのではないかと思います」

「日本の研究者たちが日中の子どもの問題、幼児教育について詳しく研究されたことに関して尊敬しています。中国に帰ってから、このような研究態度を中国の研究者にお伝えしたいと思います。真の学者とは、自分の研究にこだわりと誇りをもつべきです。政府の意図を解釈するだけでは学者とはいえないと思います」

黄 紹文

「日本の先生方がそれぞれの立場に立って、なさった研究はすべて素晴らしかったです。しかし、これは中国の現状そのものであるとは言いがたいです。一見先生が日中間の子ども教育の交流に対して、マクロな視点で明快な研究成果を挙げています。しかし、一見先生の研究内容もやはり研究者の主観的な視点が入っているように思えます。」

例えば、一見先生が日本人、また日本人研究者の立場から寄宿制幼稚園を考えて、論じていらっしゃるいました。私はそれを聞いて、日本の方は寄宿制幼稚園のことをあまりポジティブに考えていないのではないかと印象を受けました」

榎原洋一

「私の専門の小児医学では、子ども総体ではなく、一人ひとりを個人として見ます。例えば、発達障害をもつ子どもについてどのような方法がいいのか、日本のやり方がいいのか、あるいは中国のやり方がいいのかについて、文化とは別の次元で議論することができると思えます。非常に大雑把にいうと子どもたちはそれぞれの文化の中で生きており、さまざまな歴史的背景があります。といっても、医学的な視点から見ると一つの生物として存在しているという事実もあります」

山本登志哉

「朱先生が日本のアイデンティティ危機について質問されましたが、それは有効性が限界に來た欧米モデルの次が見えないことでしょう。この時代に改めて中国など他者との対比で日本を見つめ直す必要があります。たとえばお互いに迷惑を掛け合う篤い関係を重視する中国に対し、日本は迷惑をかけないことが大人の条件です。そこに欧米と異なる安定した日本的個人主義の倫理基準が見えます」

首藤美香子

「歴史・文化・思想を研究する人間に対して、自然科学を研究する方が『役に立たないことをやっているな、抽象的な議論をしてどう現実の問題を解決するのか』という印象をもたれるのは当然だと思えます。また、中国の方からコメントがありましたように、外国人が研究する場合はどうしても実態の理解ができていないという印象をもたれるのは当然だと思えます。しかし、人文科学の研究は、問題を相対化し、解決のための、選択肢の幅を広げるという役割があります。意思決定の根拠を見直す一つのきっかけにもなると私は思います」

2日目のシンポジウムでは、2日間にわたる交流プログラム全体に関して、日中の研究者から、さまざまな意見をいただきました。



3

第3回

チャイルドケアリング・デザイン

第3章

第三届东亚儿童科学国际研讨会



■主催・チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、
中国浙江師範大学杭州幼児師範学院
■共催・(株)ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
■後援・中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、
異文化比較学会、日中教育交流会議

East Asia Child Science
Exchange Program

Child-Caring Design (CCD)

小林 登

Kobayashi Noboru (医学博士)
チャイルド・リサーチ・ネット所長
東京大学名誉教授
国立小児病院名誉院長

● 危機にさらされる子どもたち

「子ども学」については20年ぐらい前から考えてまいりましたが、それは、子どもの問題をいろいろな学問の立場の人と一緒に考えようという発想です。きょうは、短い時間ですので、子ども学の柱のひとつ「Child-Caring Design (CCD)」というテーマを選びました。

「child care」という言葉は、英語の本を読みますと、よく出てまいります。それは「保育」という意味です。「care」には、もちろん「世話をする」という意味だけではなく、「気にかける」、「考える」、「心配する」、あるいは「愛する」という意味があります。ですから、この「Child-Caring Design」というのは、「子どものことを考え、いろいろと工夫をして、そして子どものために優しい目をもってデザインをする」という意味の言葉です。

なぜ「Child-Caring Design (CCD)」が必要かと言いますと、子どもは、いつでもどこでもリスクにさらされる、危機があるからです。

「Children at Risk」です。

大人の優しい目で子どもをきちんと育てなければ、子どもには、いつでも、どこでも問題が起きる。現在の世界のどの国でも、そしてまた我々、それぞれの国の過去にも現在にも、そういう問題があるということは明らかだと思います。

なぜ、子どもは危機にあうのか。

子どもは、生物的存在として生まれ、そして社会的存在として育てられるわけです。子どもは、生まれたときは、本当に何も人間らしいものをもっていない生物的存在ですが、それが保育や育児や教育によって人間として社会を担っていく大人になります。ですから、「危機にある」と言うときには、いつも社会的な面での危機であります。

したがって、我々大人には子どものために社会をきちんとする責任があるわけです。

発展途上国では、戦争や飢餓など、生命に直接関係する危機、もちろん貧困も関係しますが、そのようなことがあります。逆に、先進国では、物質的な豊かさによる生活習慣病、あるいは子どもの教育問題——不登校やいじめのような問題が出てきているわけです。

●Child-Caring Design の核となる子ども学

Child-Caring Design を確立するためには、どんな学問が基盤になるのでしょうか。

これはもう、皆さん、すぐにおわかりになると思いますが、子どもをひとつの専門的な立場だけで見ているのでは解決はできません。例えば、心理学だけでは解決はできない。教育学の先生も入り、小児科の先生も入り、みんなで考える。そういう学際的な学問である子ども学が中心の柱であります。

「Child Science」は日本語では「子ども学」と呼びますし、中国語では「児童科学」ですが、いろんな学問を学際的につなげる、あるいはいろんな学問をつなげて「環（わ）」をつくって、そこで情報を回しているうちに新しい発想が出てくる、「環学的」な学問です。

そして、子ども学のような新しい学問には新しい考え方が必要になってきます。子どもは、家庭、社会という大きな生態系、エコシステムのの中で生活しておりますから、子ども生態学という考え方も重要です。子どもの生物学的側面も社会的側面も、人間の脳の機能に関係

しておりますので、脳科学も重要です。また、子どもは生物的存在として生まれて、社会的存在として育ちますので、自然科学と人文科学を融合させる必要があります。文理融合科学という考え方も重要です。

イギリスでは、人間を幅広くとらえる「Human Science」という考え方が長くありまして、人間に関係する職業の人、例えば医師、あるいは法律に携わる弁護士も Human Science を勉強しなさいと言われてきました。「子ども学」は、いわば「子どもの Human Science」ということになります。

●「accident」から「injury」へ

先進国での子どもの死因の第1位は事故です。このごろはほとんど感染症では死にません。ここに「死因としての不慮の事故」と書きましたが、さすがゼロ歳児の場合は、事故は5位ぐらいになります。1歳から9歳の死因の第1位が事故です。10歳から14歳では、事故は第2位で、第1位はがんです。13歳から19歳の第1位も事故です。いかに子どもが事故で死ぬことが多いかがよくわかります。

しかも、事故の中で一番多いのが交通事故です。その次が溺死です。小さい子どもだとお風呂で、あるいは大きくなると海水浴ですね。それから、倒れたり、ひっくり返ったり、ホームから落ちたりということによる事故。食べ物をのどに詰まらせての窒息。そういうことで亡くなる人が多いわけです。

ですから、Child-Caring Design では、そういう交通事故の問題、あるいはお風呂に入ったときの溺死の問題を、小児科医など、子ども

に関係のある人が知恵を絞って、子どもの心身の発達状態に対応したデザインになるよう、その他、ハードウェア——建物自体のデザインについても工夫しなければいけないということになるわけです。

WHOでは最近、「事故」「accident」という言葉を使わないようになっていきます。なぜかというと、「accident」というと、「防げない」という意味が入ってきてしまうからです。そこで「injury」という言葉を使うようになりました。「外傷」だとか「受傷」という意味ですね。すなわち、子どもの事故は、防げない「accident」ではなくて、防ぎ得る、防ぐことができる「injury」なのだということです。Child-Caring Designの考え方は、まさに時代にマッチしたものになってくのだらうと思います。

●「生きる喜びいっぱい」の学校に

教育分野で、日本で大きな問題になっているものの一つに「いじめ」があります。これは、いじめが起きている学校の数を調べたもので、一番上の「氷」が全体の総計数です。最近は少し減っている傾向がありますが、こんなに高い数になっています。——図①

このいじめについては、Child-Caring Designで何かなし得るかどうかというのは難しいと思いますが、少なくとも学校が楽しく学べる場であるならば、そういうものが減ることは確実だと思います。

もう一つ、教育問題で問題になっているのは、不登校の生徒数の増加です。これは、時代の流れでどのように変化しているかを示したグラフです。大体、全国の小学校で2万人、中学校で11万人ぐらいです。

高等学校では14万人ぐらいの学校に行かない生徒がいます。中国では、このような子どもは、ほとんどいらっしやらないのではないかと思います。日本では、これが大きな問題になっています。——図②

これこそ、私は、学校のChild-Caring Designの問題だと思います。それは学校の制度、教え方を含めて、さらには学校の建物や教材など、ソフト、ハードの両方の面にかかわってきます。すなわち、子どもたちが、学ぶ喜び、遊ぶ喜び、そして「生きる喜びいっぱい」になれるようなデザインをする必要があるわけです。

●情動や本能にかかわる脳の重要性

そして、子どもを生きる喜びいっぱいにするためには脳科学的な発想が重要だと思います。

我々の脳を縦切りにしてみますと、一番上に、知性、理性をもった新しい皮質があつて、その下に古い皮質、情動や本能にかかわる大脳辺縁系があつて、そしてその一番奥の間脳や脳幹には体を動かすプログラム、さらには脳幹には呼吸や循環といった生体機能を動かすためのプログラムがあります。人間の脳は、そのような三層構造を成しているわけです。

子どもたちの生きる喜びについて言えば、最も深いかかわりをもっているのは、情動や本能にかかわる大脳辺縁系になります。三層構造の真ん中にあつて、大脳辺縁系は最も基本的な運動や生存に関係する機能をよりよく働かせるとともに、人間特有の精神活動に関する知性や理性の働きとも密接にかかわりをもっています。

子どもたちが目をきらきらと輝かせて、何かを楽しんでいるときには、生理的な反応だけではなく、知性や理性ともつながる、喜怒哀楽の座となる大脳辺縁系が重要な役割をはたしていると確信できます。

チャイルドケアリング・デザインを考えていく上で、子どもたちの情動や本能に関わる脳の働きを重視するという発想は、欠かすことのできないものだと思います。

お話をまとめて終わらせたいと思います。それぞれの専門家は、子どものことを私たちは一生懸命やっているとおっしゃるし、確かにそうですね。しかし、ちょっと考えてみると、いつでも何となく、子どもの立場でなく、大人の立場でいろんなことをやったり、決めているような気がしますし、そういうことが現実起こっていると思います。特に我々の関係していない社会の部分には、それが大きいと思います。

先ほど、学長先生の後にごあいづを申し上げましたように、エレン・ケイが、20世紀を子どもの世紀にしようという本を書きました。しかし、20世紀は、二つも大きな戦争が起こり、子どもの世紀にはなり得なかったと思うのです。ですから、21世紀こそ、我々子ども学の志をもつ人が話し合って、英知を絞って、Child-Caring Design を一つの大きな柱とした社会改革をやっていかなければならないと思います。皆さんとともにやっていきたいと思いますので、互いにがんばりましょう。

図1

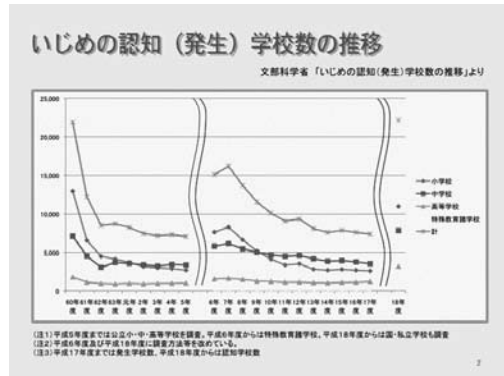
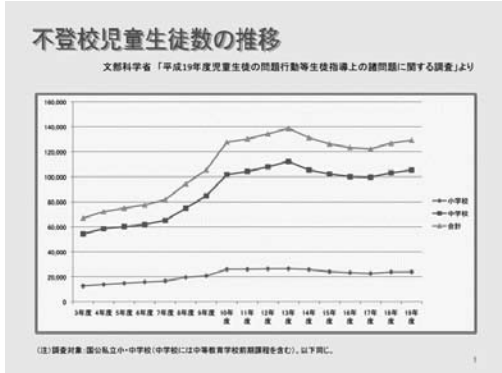


図2



③ ② ①
Child-Caring Design (CCD)
子どもが見る世界
幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめくって

⑥ ⑤ ④
子どものウソは「嘘」？
発達障害と保育
幼児の社会的グルーミング

⑦
子どもの感覚・知覚発達障害と
家庭教育環境のデザイン

子どもが見る世界

朱家雄

Zhu Jiaxiang
華東師範大学教授

就学前の子どもへの教育は科学的でなければなりません、同時に子どもに背いてはいけないと思います。子どもたちはどのように世界を認知しているかを知ること、彼らの教育に大きく役立つことになるでしょう。

私たち子どもの研究者は「就学前の子どもがどのように世界を認知しているか」について、さまざまな認知発達の理論を駆使しますが、大人と子どもの間には越えられない溝があります。そこで、子どもの素朴理論に関する発達研究、自分の子ども時代を振り返ること、原始的な思考について考察すること、子ども独自の言語を解読することなど、子どもに寄り添った理論考察が必要になります。

1. 子どもの素朴理論について

子どもが獲得した知識は理論という基本的な性質が伴っています。

乳幼児期には本当に単純なのですが、だんだんと複雑になってきます。子どもの理論は、科学理論のように、正確でつながりをもつものではないが、科学理論と類似点があり、検討や訂正によって形を変えていきます。すなわち、認知発達には理論の変化と発展であり、各領域で一連の素朴理論が形成されるプロセスと言えます。

私たちは、科学的な基盤のもとで、子どもの認知発達のルールを見つけ、普遍的なルールを発見することによって、子どもの教育・保育を指導していく必要があるでしょう。

○素朴理論の例…種から芽が出る理論

子どもにとって、子猫は地上から生まれます。よって子猫の成長は、いわゆる種から芽が出たのと同じことです。子どもは彼らの豊富な想像力を生かし、種から芽が出ることで、子猫が誕生したという理論を作り上げました。

おそらく、科学の本質は豊かな想像力に秘められているのです。このプロセスの中で、人々は質問をし、意義を唱え、さらなる検討を進めますが、子どもたちにとっては、彼ら自身の発達に大きな意味をもっているでしょう。

2. 自分の子ども時代について

自分の子ども時代に経験したこと、体験したことは、子どもを理解する上で最も信頼できる糧になります。子ども時代の記憶はさほど多くありませんが、記憶されている事件は人の発達に影響をもつ事件が多いと言えます。

例えば、私自身の思い出として、子どもの頃に見た上海展覧館の塔の思い出があります。その塔のてっぺんには星型のマークがついていたのですが、それを別の角度から見ると、ただの長方形の板のように見えました。子どもの頃の私は、正面から見たてっぺんに星型のある塔と、横から見たてっぺんに長方形の板のある塔を、同じ塔だと認識することはできませんでした。見る角度によって、同じものがまったく別の物に見えた。そのことはとてもよく覚えています。

3. 原始的な思考について

子どもの思考は原始人類の思考と類似する部分があります。個体の発達は種の発達全過程の繰り返しであると考えられるからです。

原始的な思考においては、対象と観念と主体の次元が、複雑に混ざり合っています。思考過程においては、対象は「現象」であると同時に、

概念の「幻」であり、さらに主体の「心象」(情緒意向)でもあります。三者は交じり合っていて、区別ができません。客体と主体が混合されたり、事実と概念が混合されたり、物理と心理が混合されたり、実体と幻が混合されたり、それらが原始的な思考の基礎となります。

○原始的な思考の例…6歳児との会話

太陽はどのように生まれたの? —— 「最初からあった」

太陽はずっと一つだけですか? —— 「いいえ」

では、いつから太陽になったかな? —— 「物心ついてから」

何でできたの? —— 「火」

どのようにできたの? —— 「火事があったから」

空にどうして火があるのかな? —— 「誰かがマッチで火をつけたでしょう」

マッチはどこから? —— 「神様が投げたから」

4. 子どもの「言語」を解説

子どもは自分の独特な方法で(100の言語)を表現し、自分をアピールします。「100の言語」とは、北イタリヤ北部の小さな町レッジョ・エミリアで行なわれた子どもたちとの創造的な活動や対話から生まれた『子どもたちの100の言語』にならうもので、子どもの言葉に耳を傾け、読み取り、解説することで、子どもの考え方や見方を理解するための切り口となるものです。

幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめぐるって

秦 金亮

Qin Jinliang
浙江師範大学杭州幼児師範学院院長

幼児の発達に効果的な幼稚園環境は、大人の願望による考えや大人の根拠のない想像に基づいて創り出されるものであってはなりません。幼児を基点にして、心の声に耳を傾けて、その興味や好みを理解し、認知の特性を把握し、幼児に適した幼稚園教育の環境を創造することが重要です。

本研究では、幼児の好きな色彩・好きな空間・興味探求の傾向から、幼児に適した幼稚園の色彩設計・空間設計・クラスや年次のテーマ活動設計の法則性の問題について明らかにします。

幼児の発達に適した環境づくりは、教育の出発点です。J・デューイによると、「教育者の主な責任は、環境条件から形成した一般的な原理を理解するだけではなく、



杭州幼児師範学院附属幼稚園

実際にどんな環境が（幼児の）発達に有効か、その経験を知ることが大切である。もつとも重要なのは、現有の自然と社会環境を利用し、そこから価値が高い経験を作れるものを見出し、抽出できることである」と述べています。

状況学習理論によると、児童における知識技能の習得は、大人の抽象的な論理記号によるものではなく、実際の活動を通して行われます。現実の状況の中で行われる学習でしか、学習者に知識の意義と価値をもたらさないからです。神経構築主義の理論によると、幼児大脳皮質が精細化していく発達過程では、生まれつきの神経細胞の遺伝によるものもありますが、神経系統外から与えられる刺激と皮質の付近の部分の競争はもっと重要だと考

えられます。

幼児に適した教育環境のつくりは、幼児の興味、好み、ニーズ、情感と個性の特徴を前提条件にして考えなければなりません。

以下、3つの論点にまとめて検討します。

1. 幼児の好きな色彩にはどんな特徴があるか。幼児の色彩世界をどのように創造するか。
2. 幼児の好きな空間にはどんな特徴があるか。幼児の空間世界をどのように創造するか。
3. 幼児はどんな活動を望んでいるか。テーマ活動を行う環境をどのように創造するか。

1. 幼児の好きな色彩にはどんな特徴があるか。幼児の色彩世界をどのように創造するか。

研究 1

4歳の幼児27人がカラーの蝶々を塗り絵する――

- ・ 86%の幼児は赤、黄色、緑、水色、ピンク、オレンジを使用
- ・ 14%の幼児は紺色、紫、褐色、茶色を使用
- ・ 黒、灰色、白を使用する幼児は一人もいない



② 子どもは段差、立体性、変化のある空間を好む



① 色の配列を工夫し、対比効果を狙う

研究 2

2・3歳の幼児20人がカラーで自由に線を描く――

- ・ 80%は赤、黄色と緑、鮮やかな色を使用
- ・ 20%はピンクとブルーを使用
- ・ 黒、灰色を使用する幼児は一人もいない

研究 3

陳立、汪安聖（1965）大人と幼稚園児の色の好みの順に関する研究――

- ・ 幼稚園児が好きな色の順番…赤、ブルー、緑、黄色
- ・ 大人が好きな色の順番…ブルー、赤、緑、紫、オレンジ、黄色

研究 4

ドイツの心理学者の研究によると、水色、淡黄、緑、橙色の環境で生活する児童は、愉快、朗らか、元気な気持ちになる。一方で黒、黒茶色、灰色、白の環境で、疲れる、不安、憂鬱など消極的な気持ちになりがちである。

色彩設計原理

1. 幼児の色好みに合わせ、幼稚園のメインカラーを決める。メインカラーは幼稚園の壁、外壁、内壁、おもちゃ、地面、ガーデン、室外活動場などに使う。

2. 巧みに色の調整を行い、相似に、或いは対照的に仕上げる。

3. 色彩の生理、心理反応に基づいて、暖色と寒色、距離などがもたらす心理効果を上手く利用する。

図1

2. 幼児の好きな空間にはどんな特徴があるか。
幼児の空間世界をどのように創造するか。

① 幼児は、重層的、立体的な、変化に富んでいる空間が好き——

幼児の目線からデザインした昼寝室と活動室には小さい階段を、またベビーホームには「読書エリア」などを作り、空間の立体性を強調します。移動ベッド、移動タンス、移動本棚、移動イーゼルなどを利用して、空間にさまざまな変化をもたらします。

図2

② 幼児にとって面白い、チャレンジできる空間が好き——

活動室、昼寝室は二重設計にしたり、隠れん坊のようなイーゼルを作ったりして、面白さを増します。また、幼児はでこぼこな道を好むので、三角形の材木、木の皮、

③ おひるね空間は二層型にし、衝立はかくれんぼができるように設計。子どもに興味を持たせる工夫をしました。



④ 子どもはチャレンジ精神旺盛で、平坦の道よりは、起伏のある道を選ぶ。足裏血液循環や感覚能力の発達にも有効。



玉石、すべての磁器などで「でこぼ道」を作りました。これは幼児のチャレンジ、冒険したがるニーズを満たし、幼児の足の裏の血液循環を促進し、感覚能力を高めることにもつながっています。

図3

③ 幼児は自分専用のプライバシー空間がほしい——
4-5歳の幼児はすでに自分の秘密がある。感情の発散、友達との交流のために、「感情の階」「秘密の小屋」をデザインしました。

図4

④ 幼児が自然に接近し、馴染みたがる気持ちにこたえて、石の地面、砂地、植物園、動物部屋など自然環境に近い室外空間を作りました。

3. 幼児はどんな活動を望んでいるか。
テーマ活動を行う環境をどのように創造するか。

幼児は自由に遊ぶ希望を強くもっていて、状況に応じてさまざまな役を演じることを好み、しかも強い表現願望と高度な模倣能力を有しています。テーマをめぐって

環境をつくり出すのは、幼児がテーマ活動に参加する意欲を引き出すだけではなく、探究心を満たすこともできると思われます。

①壁面をテーマ活動の中に有効に利用すること。壁面に変化を与え、壁を生かし、テーマ活動の中に幼児と「対話」させます。また、壁面の上にテーマ活動を記録し、幼児に自発的に探索してもらいます。壁面を使ってテーマ活動の主旨をはっきりさせたり、壁面に幼児に自分自身を表現してもらったりして、壁面を幼児の自己表現の場に

仕立てます。

②イキイキした環境をつくり、テーマ活動の雰囲気を出し、幼児が積極的にテーマに参加し、探究する意欲を引き出します。現実にそっくりな場面を創造して、幼児にこのような創造活動に参加してもらい（例えばコンビニ）、または積極的に現実を探究する場面を作り出し意欲を引き出すなど、さまざまな場面の中でさまざまな役割に扮することで、幼児の社会性発達を促進します。

— 図 7 —

⑤ 友達と内緒話のできる空間



⑥ 自然の素材を活かした室外空間



⑦ 子どもスーパー（買い物ごっこ）



子どものウソは「嘘」？ — 語りのちから —

内田 伸子

Uchida Nobuko
お茶の水女子大学副学長

● 生後10か月の認知革命

3つの話をいたします。まず、創造的な想像力のメカニズムについてお話をいたします。2番目に、子どもの「ウソ」は、本当に「嘘」なのだろうか、大人が考えるような「嘘」なのだろうかということです。3番目に「語り」という行為の中に意味を求めるといふ努力が働き、その結果、「ウソ」のようになってしまふことがあるのだということを検証していきます。

それでは、まず創造的想像のメカニズムについてお話をいたします。

乳幼児期に認知発達上、非常に大きな変化が起こる時期が2度あります。第1番目の変化が起こる時期は、生後10か月のことです。私は「第一次認知革命」と名前をつけております。

まず、イメージがこの時期に誕生します。大脳辺縁系にある海馬が活動し始めるために記憶機能が出現します。対人関係について感情とかストレスに対応するものが活動する部位がこのあたりですが、ちょうど、ここが働き始めるのが10か月です。

記憶も出てきますし、イメージが誕生しますから、モノの同一性の認識も出てきます。モノは見えなくなっても存在し続けることを

イメージとして持ち続けることができるようになるのが生後10か月のことです。

この時期によく赤ちゃんが見せる行動があります。それは「社会的参照」——他者に問い合わせるという行動です。向こうから犬がやってきた。抱っこしてる赤ちゃんが、それを見つけてびっくりします。その後、きつとお母さんに「あれ、なあに？」と問い合わせる。これが社会的な参照という行動です。

● 経験という素材の加工

それでは、いよいよ、創造的想像のメカニズムについて、これからお話をしたいと思

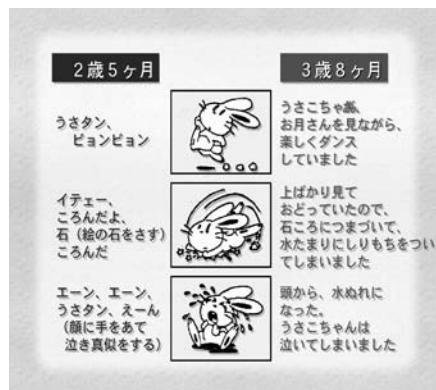
ます。見えないものを思い描く能力です。

モノのイメージを描くためには、材料が必要ですが、子どもたちがそれまで生活の中で蓄積してきた体験とか経験、五感を使った経験が材料になります。ですから、想像する、イメージを描くということは、経験に依存しています。経験そのものではありません。経験をとり出して、それをつなげて、筋道をつけたり、それから、意味のあるような全体にまとめ上げるときに、必ず何か新しいものがつけ加わります。そこに creativity が生まれる可能性があるわけです。

今、1年経験が違っていると、どのぐらいイメージが違ってくるかという実例をお見せしたいと思います。こういう3枚の絵カードを子どもの前に置いて、「お話をして」と頼みます。2歳5か月と3歳8か月とでどのぐらいイメージの描き方が違うのかをお目にかけたいと思います。——図①

まず、2歳5か月です。「うさタン、ピョンピョン」、「イテェー、ころんだよ、石、ころんだ」、「エーン、エーン、うさタン、えーん」——両手をこうします。

図①



3歳8か月。1年3か月分、余分に経験をしていますと、このようなお話になります。「うさこちゃんがお月さんを見ながら、楽しくダンスしていました」、で、「上ばかり見て踊っていたので、石ころにつまづいて」「しりもちをついてしまいました」、「頭から、水ぬれになった。うさこちゃんは泣いてしまいました」。

この緑色で書いたところの発話は、絵にはかかれていなくても、自分の中の経験を思い出して、この絵を解釈してイメージの中に取り込んだ、加工した部分です。

ここで、記憶と想像することとの違いをちょっと整理してみました。

素材になるのは経験です。なるべく素材に加工をせずに、類推や因果推論を働かさずに取り出すのが「記憶」です。その結果、出てくるものは知識の再現だけです。つまり、経験がそのままの形で取り出されるのが「記憶」であります。

それに対して、「想像」の方は、さまざまな記憶の中から経験を取り出して、類推を働かせたり、あるいは因果推論を働かせたり、加工をいっぱいすることで、映像的なイメージや言語的なイメージを描き出してつくり上げるわけで、クリエイティブな表象、クリエイティブなイメージということになります。

●根源的な類推の働き

この加工をする中でも、特に「類推」は、新しい知識を生み出すための道具であります。もし、私たちが古い経験をそのままの形で再現するとすれば、私たちは過去に向かって生きているにすぎません。新しい未来に向かって前進するためには、新しい知識を生み

出す必要がある。人は常に帰納的に物を考える。古い経験を使いながら、なおかつ新しい情報を取り込む。その仕組みが類推の働きということになります。

子どもたちは、もう、どんなに幼くても類推の働きを絶えずしております。例を持ってきました。

夕方、夕焼け空に感動しながら帰ってきた男の子は、家に帰って御飯を食べて、お風呂に入って窓をあけたら、満月が見えた。そして、目の前の赤みが差した月は、先ほどの夕空のあの夕焼けが固まったように見えた。その瞬間に言った言葉が「ゆうあけこあけのかたまりだ!」ということです。

4歳の女の子は、ふだんから、雲って不思議だなあ、形が変わることもあるし、見えなくなっちゃうこともある、きょうみたいに、ふたをしちゃうようなときもある、雲ってだれがつくっているんだろうと、いつも考えていた。そこで、工場の煙突から、もくもくとわき上がる煙を見た瞬間に、「ここで雲を作っていたのか!」と。その子なりにわけがわかった瞬間ですね。

それから、6歳の女の子はお通夜の席で、そばのお母さんにひそひそ声で話しました、「パンダはおめでたくない動物なんだね、きつと」と。これは、日本の習慣ですけれど、お通夜とかお葬式には白と黒の幕を張りめぐらせます。子どもたちはパンダは大好きなんですけれども、パンダの白黒と、お葬式の幕の白黒とが共通であることに気がついた瞬間の発話です。

子どもはこんなふうに、過去の経験と目の前の出来事とを絶えず結びつけ、違いと共通性を抽出する、類推を働かせているという発話の例です。

こんなふうに、類推や因果推論などを働かせて新しいイメージの世界をつくる。そういう仕組みがあるからこそ、私たちは未来に向かって前進することができるとし、新しい知識をつくり出すこともできるわけです。

● 記憶の改変から生まれるウソ

今、見てきたことは、想像のメカニズムです。私たちが普通に目の前の出来事と過去の経験とを結びつける中で新しいものが生まれる。そ

の仕組みについてお話をしてきましたが、いよいよ、子どもの「ウソ」は本当に「嘘」なのかということを検証していきたいと思います。

子どもたちの発話の中では、報告の順序が変わることがしばしばあります。

ある出来事が起こったとき、その順序は非常に重要です。その一つの例を出してみたいと思います。

拓哉君が慎吾君に石を投げました。慎吾君は拓哉君に石を投げ返しました。投げられた拓哉君は、もう、泣きながら、お母さんのところに走って帰りました。「慎吾くんが」「ぼくに石を投げたの」と、泣きながら拓哉君は報告したわけです。そうすると、慎吾君が叱られることになりました。拓哉君は果してウソをついたのでしょうか。

このような報告の歪み、あるいは記憶の改変は、いつも起こります。心の中の観念の系列は、A→B→Cですが、一部だけが強調されることがある。Aが忘れられてしまったのが、この例であります。その結果、因果関係が逆転してしまうわけです。

拓哉君は、自分が投げられたことだけが

記憶に残っているのです、それを母親に訴えた。これを、最新の出来事だけが記憶される、「recency effect」と言います。それから、最初に起こったことも印象深いことがあります。それを心理学では「primacy effect」、「初頭性の効果」と呼びます。今回の事件は、まさに「新近性の効果」の例であります。

このように、子どものウソには、報告の記憶の誤りから起こるウソがよく見られます。

思い出したときに、その意味がわからない場合、私たちは、自分の経験を取り出して、それを埋めて、そして意味がわかるように変えてしまいます。ここでもまた、経験を複合したり、脈絡をつけるといった働きの中で、新しいものがつけ加わる。変化が起こると同時に、それは、かつてなかったような、新しいものになっている可能性があるわけです。

物語もイメージと全く同じでして、素材になるのは経験です。しかし、経験そのものではない。必ず情報の改変や付加が起こって、それが新しい物語として語られるわけです。

しかも、その語るというふうなことで言葉にするというのは、言葉を通すとともに、体

を通しますので、この活動がまた新しい情報を付加する装置になっていると言えます。

物語、語るという音声化を通して、5つのことが起こります。まず情報が豊かになりますし、それから形が決まる。定型化する。因果関係がはつきりする。頭の中でイメージを描いていたときは違って、語ること、ほかの人に伝わることによって、またその反応を見ながら頭の中のイメージが深化していく。それから、語ること自分の声を聞きますので、俯瞰（ふかん）してみる。メタ認知というか、それを対象化して省察すること、これも起こるのです。

● 大人が子どもをうそつきにする

以上から、幼児期の意図的なウソは少ないというのが結論です。大部分は単に出来事を考えているうちに話全体の筋道を変えてしまうような結合が新たにつけ加わってしまうために起こる誤りです。経験を思い出すという活動はすべて再構成であるということなのです。ゆえに、幼児期の子どものウソは「嘘」ではない。大人も子ども、想起するという

ことは再構成である。意図的なウソはやはり第二次認知革命、5歳後半過ぎからでないといけない、ということです。

第二次認知革命で起こること。まずプランの力が出てきます。それからメタ認知能力、対象を意識化する能力が出てきます。可逆的操作ができるようになると因果推論ができるようになります。これらの3つのことが連携協働するようになるのが5歳後半の頃です。

ちょうどこの第二次認知革命の時期の神経学的な基盤を見ますと、ワーキングメモリーというところと海馬、扁桃体がリンクする。まさに情報処理系が質的にアップする。そういう時期とも対応していると考えられます。

したがって、大人が子どもをうそつきにするのです。大人が「嘘ついた!」というふうの意味づけてしまうと「あ、これが嘘なのか」。この経験が反復されることにより、5歳後半過ぎからはこれを方略的に、意図的に使うようになります。これがいわゆる大人の言う「嘘」です。それをつけるようになるのは5歳後半過ぎのことです。そんなふうに言えるかと思います。

① Child-Caring Design (CCD)
 ② 子どもが見る世界
 ③ 幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめぐる

④ 子どものウソは「嘘」？
 ⑤ 発達障害と保育
 ⑥ 幼児の社会的グルーミング

⑦ 子どもの感覚・知覚発達障害と
 家庭教育環境のデザイン

発達障害と保育

榊原 洋一

Sakakihara Yoichi
 お茶の水女子大学教授

● 困った子どもと発達障害

きょうの主題は、小児科の医者の方の関心の対象でもあります。日本では多くの教育関係者が頭を悩ませている発達障害の問題です。

元気で健康に育っている子どもが多い中に、幼児教育の現場で子どもの行動で非常に戸惑うものがあることは皆さんご存じだと思います。子どもが集団に入りにくい、大人の言うことを理解できないというようなことがたくさん起こります。

このスライドは岡田先生という発達心理の方が、集団の中でどういう行動が例えば保育園や幼稚園の先生にとって問題なのか、どういう行動でそういう方が悩んでいるかということをもとめられたものです。先生の指示に従えない。集団の中で一緒に行動できない。あるい

幼児期でちょっと気になる行動

集団で

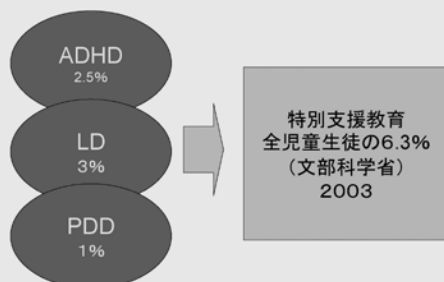
落ちつきがない
 友達とトラブルが多い
 ものをなくしやすい
 集団から離れがち
 友達と遊びにくい
 すぐ泣く
 話すが会話がずれる
 不器用

家で

近所の子と遊ばない
 好き嫌いが多い
 親以外の大人を避ける
 気分が変わりやすい
 わがまま勝手
 生活リズムが崩れやすい
 同じ事を繰り返したがる
 行儀しつけが身につかない

岡田眞子氏 による

発達障害の全国調査結果



は一人だけ別の行動をしてしまう。

こういう子どもの行動はどこでも見られる子どもの普通の行動という見方もできると思います。しかし同時にこういう子どもたちは、保育園や幼稚園のときにはよくても、小学校へ上がるようになると、学業の面で、あるいは集団生活、社会生活の面で適応できないといった問題を起こすことが多いこともよく知られています。

日本の文部科学省は2003年に普通の小学校と中学校に行っている子ども4万人を対象にそのような行動があるかどうかを調べました。ADHDというのは注意欠陥多動性障害。LDは学習障害。PDとありますのは別の名前で言うとう閉性障害です。そのような行動の特徴を示す子どもの割合は、それぞれ25%、3%、1%。全部を足すと63%のお子さんにそのような行動の特徴があることがわかりました。

これには多くの人が非常にびっくりしたわけです。というのは、普通の学校に行っている、つまり知的な遅れがないお子さんの中の63%がそういう行動の特徴をもっているということがわかったからです。

先ほど申し上げました子ども、気になる子どもの行動の特徴は、この文部科学省の調査で明らかになった発達障害という名前で呼ばれる子どもたちと多くのところがダブっています。文部科学省はそのための特別支援教育の方針を出しましたし、法律の方でも発達障害者支援法が日本で制定されました。日本ではそのために学校の先生方あるいは小学校の前の幼稚園、保育園の先生方もこういう発達障害についての知識をもつことが必要になっています。

● ADHDの症状を緩和する自尊感情

それでは、この発達障害というものがどのようなものかということをお話したいと思います。

最初にお話しします注意欠陥多動性症候群の子どもたちのまず一つの特徴は、注意力がない、集中できないということです。多動と衝動性の行動に関しては、机に座っていられない。あるいは机に座っていてもすぐに横を向いてしまう。先生の言うことを最後まで聞けない。こういう特徴が知られています。

このADHDという問題は男の子に非常に多くて、4から7対1と、女の子は少ないということもわかっています。男の方が多動で忘れっぽいということだと思っています。

では、どうしてこういうことが起こるのかということ、いろいろ調査がありますが、その中で一つわかっているのは、家族内集積性と言って、同じ家族のメンバーがなりやすいということが知られています。あるお子さんがADHDと診断されると、兄弟では25%から35%、お母さんは15%から20%、お父さんは25%から30%が、やはりそのような行動の特徴をもっているということがわかっています。さらにADHDのお子さんにはほかの発達障害が合併しやすいこともわかっています。

そういう特徴というのは、学校とか幼稚園、そこに行って初めて出るものなのかということなのですが、2歳のときから多動や衝動性が見られることが、最近の調査でわかっています。

あるアメリカの心理学者が、ADHDのお子さんが乳児期、それから幼児期、そして学童期と、どのように変化しているかを4つの型に分けて研究しました。すると、もうすでに乳児のときから行動の特徴がわかる。それから、学前教育のときに一方的な押しつけがましい対応をすると、成長するとADHDの行動が出て反抗挑戦性障害という状態になってしまふということがわかっています。

これは非常に興味深いことなのですが、赤ん坊のときには多動が目立っても、幼稚園、保育園、学校で建設的な対応、本人を支えるような対応をすると、小学校になるとこのADHDはおさまってしまうパターンがあるということです。ADHDになるかどうかは遺伝的に決まっていますが、その後の対応、特に学童前つまり幼稚園、保育園のときの対応の仕方、大きく変わるということです。

4歳前後というのは周りの大人の反応を子どもは見ながら自分自身の行動のルールを決めていく時期に当たります。ですので、幼児教育がこういう生まれつきの行動特性に対して大きな影響を与える可能性があるということを示しているわけです。

このことに関する一つのキーワードとして自尊心という言葉があります。ADHDの子どもは、いろいろな行動の特徴のために大人から叱られたり、友人からいじめられたり、仲間外れにされたりする経験が幼少期から多いということがわかっています。自分が誰かから愛されていて、自分の存在は大事なのだという感情が自尊心ですが、それが育たないことが非行につながるということも知られています。

日本では、幼稚園、保育園あるいは小学校でADHDのお子さんの

自尊心を壊さないようにどのような教育をすればよいということが熱心に研究されています。

●幅広い概念となった自閉症障害

もう一つ、重要な発達障害の一つであります自閉症のお話を簡単にしたいと思います。自閉症は今から60年ぐらい前にアメリカのレオ・カナーという人が発表した発達障害です。

一つの特徴としては、人と社会的な関係、対人関係をつくるのが下手であるということです。目を合わせたり、他人の顔の表情を理解したり、あるいは自分からそれを示したりすることがうまくできない。5歳ぐらいになると子どもというのは他人の気持ちを理解する、推論することができるようになります。しかし、自閉症の子どもはそうした他人の気持ちを理解することが非常に下手なのです。

言葉の遅れというのも自閉症の特徴です。私が今でも病院で子どもを見ていると、言葉が遅れたといつて私のところに来るお子さんの多くは自閉症です。また、特定の物とか場所、行動に非常にこだわるということも自閉症の特徴としてあります。自閉症はカナーが報告した頃と違って、自閉性障害というやや幅広い概念でとらえられるようになってきています。

自閉症の子どもの全体の20%ぐらいは次第に言葉が出てきて、知的な発達も正常範囲になる。こういうお子さんを高機能自閉症と言っております。さらにカナーより1年遅れた1944年にオーストリアのアスペルガーという小児科のお医者さんが言葉の遅れとか知的な遅れ

のない自閉性障害を発表しまして、アスペルガー症候群という名前です。呼んでいます。

スウェーデンの Gillberg という先生が、アスペルガー症候群の診断の根拠、基準を示しています。社会的に友達をついたり、友達と交わることが非常に下手である。社会的なシグナルを理解することができないと書いてありますが、これはアスペルガー症候群の中で極めて重要な特徴です。

最新のブレンイメージング、脳の中の活動を見るようなヘッドスキャンとか機能的MRIという方法によって、アスペルガー症候群の頭の中でどのようなことが起きているのかが調べられています。その結果、私たちが他人の顔の表情とか視線、あるいは声の調子からその相手の人の気持ちを推しはかるときに使う必要な部分の脳の活性化が十分ではないということがわかっております。

アスペルガー症候群の日本の作家がいますが、この方は本の中で私は人の笑っている顔と怒っている顔の区別がつかないというふうに告白されています。アスペルガー症候群の人は子どものときから周りの大人の顔の表情がわからず、そのために社会的なルールが理解できない。そういうことが起こっていると考えられています。

●言葉の背後に苦しむアスペルガー症候群

アスペルガー症候群の人は、例えば言葉はしゃべれるのですが、言葉の後ろにあるその話し手の気持ちを理解することが非常に下手であるということもわかっています。私たちは同じことを言うのにも、相

手を褒めるときの言葉遣いと叱るときの言葉遣いは違いますし、もちろん顔つきも違います。それがアスペルガー症候群の子どもは理解できないのです。そのために、例えば、コミュニケーションで他人の身振りとか顔の表情を理解できないだけではなくて、本人自身もそういう形で顔の表情を変えたり身振りを示したりということができないという特徴があります。

私たちは他人とのコミュニケーションというと、それは言葉が一番中心だと思われると思います。しかし、実際はそうではなくて、その人の顔つき、視線、あるいは体の動作、こういうことで大体その人が自分とどういう関係にあるかということを理解していきます。特に幼児期はそうように理解していきます。

それから、私たちはお話をしているときに比喩あるいは反語といったような言葉のレトリックをいろいろな形で使います。例えば幼稚園の子どもが何かいたずらをしているときにただ叱るのではなくて、「さあ、いい子はどうするのかな？」という疑問文で聞きますと、子どもは「あ、これは疑問文で聞いているけれども、本当は叱られているのだ」ということがわかります。

私たちは社会生活をスムーズに行うためにはいつも社会的な嘘をついています。内田先生がおっしゃっているように、5歳以上になると相手の気持ちがわかるので、社会的な嘘や世辞を使うようになります。例えば、女の先生が派手な洋服を着てきて教壇に立って、「どう、これ、似合うでしょ？」と聞いたときに、どう答えればいいか。それはどう思っても「お似合いです」というのが正しい嘘なのです。こういう社

会的な嘘（お世辞）をつくことで私たちは仲よく暮らしていくことができるわけです。

しかし、アスペルガー症候群の子どもはそれができないのですね。全部正しいことを言ってしまう。あるいは人の気持ちが変わらない。知的には正常であるが、社会的なソーシャルスキルがうまく身につかないという特徴をもっています。

それから、特定のものに非常に強い関心をもつというのもアスペルガー症候群の子どもの特徴です。そういう子どもの中には例えばまだ3歳なのに、日本の場合だと、もう漢字が読めてしまう。そういうお子さんもあります。

あるいはカレンダーサヴァンと言っていますが、例えば「10年先の5月3日は何曜日か」と言うと、たちどころに答えてしまうような子どももいます。どうしてかといいますと、アスペルガー症候群の子どもは知的な能力は高いのですが、人の顔の表情や人間関係から何かを予想するというようなファジーな、曖昧な情報処理が苦手です。そのためどこに行っても変わらない、いつも同じであるものに強い愛着を感じるようになる。カレンダーというのは世界中どこでも同じわけですから強い関心の対象になるのです。

●幼児教育者の大切な役割

まともに入りますが、こういうお子さんたちに幼稚園あるいはもう少し前からそういう行動特徴があるということが最近わかったために、幼児教育あるいは小学校の教育の関係者は正しい知識をもつ必要

があるというように認識されているわけです。そして、そのときに幼児教育の専門家が非常に重要な役割を担うことになります。

それはなぜかと言いますと、日本では最近子ども数が減っていく少子化が問題ですし、中国では一人っ子政策によって子育て経験が乏しくなっていますが、子どもがたくさんいれば、子どもというのはこういうものだということが親でもすぐにわかります。しかし、子どもが一人しかいなければ、子どもというのはどういふものかわかりません。

そこで、たくさんの子どもを見ている幼稚園の先生、保育園の先生、幼児教育の専門家の方々が、最初に子どもに発達障害があることに気がつく可能性が高くなりました。そのために特別支援教育の体制の中では専門家が一丸となって、こういう子どもたちに早くから気がついて、正しい指導や教育をしていくことが望ましいということで、日本ではその対策が今進んでいるところです。

① Child-Caring Design (CCD)
子どもが見る世界
② 子どもの好みと幼稚園の環境づくりをめぐる
③ 幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめぐる

④ 子どものウソは「嘘」？
発達障害と保育
⑤ 幼児の社会的グルーミング
⑥ 幼児の社会的グルーミング

⑦ 子どもの感覚・知覚発達障害と
家庭教育環境のデザイン

幼児の社会的グルーミング——追従的行為の発生

傅根躍

Fu Genyue
浙江師範大学教授

本研究では子どもが4才から他人に追従的行動を始めることを明らかにしました。実験では、幼稚園児たちに、幾つかの絵画作品の点数をつけるよう求めました。子どもたちがこれらの作品に得点をつけ終わった後、調査員は、待機させていた人を1人呼び、子どもたちが点数をつけた絵の中の1枚を指して、「これはこの人が描いた絵だよ」と言ってから、再びその作品に点数をつけさせます。

3才の子どもは終始一貫して、その点数が合理的であろうとなかろうと、最初につけた点数を繰り返します。ところが、4才になると、子どもは、作者を前にして、尋ねられた時には点数を高めにするようになります。これは、子どもが4才で追従的行動を試み始めていることをはっきり示すものです。さらにこの研究では、子どもがよく知っている人や大人に対して、より多く追従的行動を取ることわかりました。

■追従的行為の発達研究における理論的意義……

1. 大人の印象管理 (impression management) の方略の発生に関する知識を提供できる。
2. 迎合行為 (ingratiation behavior) の方略を適切に使いこなすことは子どもの社会化にとっては重要である。
3. 追従的行為の発生と発達に関する研究は、矛盾を協調する子どもの社会交際規則の能力 (即ち、社会問題を解決する能力) を把握する機会でもある。
4. 追従的行為の発達研究は子どもが適切な言語表現規則 (display rules) を習得する情報をも提供できる。

二.研究の過程と結果(2)

材料および手順

- ・ 個別実験
- ・ 一組の人物画(実験用と制御用)
- ・ 人物画を評価させる
- ・ 実験用と制御用の人物画を改めて評価させる
- ・ 実験の動機は、子どもたちが同じ人物画に対して、作者がいるかないかによって、絵に対する評価が異なるかどうかということである。大人の追従的行為に対する研究方法に従って、子どもが作者の前での二回目の評価と作者不在時の一回目の評価との間に生じるプラスの差を追従的行為の指標とする。

9

幼児の社会的グルーミング：追従的行為の発生

Social Grooming in the Kindergarten: The Emergence of Flattery Behavior

Genyue Fu

Zhejiang Normal University, P. R. China

Kang Lee

Institute of Child Study, University of Toronto, Canada

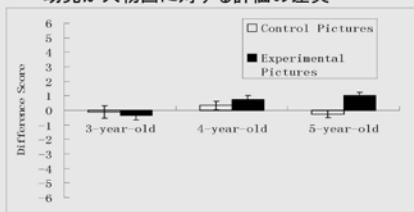
1



二.研究の過程と結果(3)

実験結果:

図1. 作者がいる場合と作者が不在の場合における幼児が人物画に対する評価の差異



10



二.研究の過程と結果(4)

- ・ 得点差は2(画のパターン:制御画と目標画)*3(年齢組)の分散分析を行う。
- ・ その結果:年齢の影響は顕著ではなかった、 $F(2, 156)=2.64, p>.05$ 。画のパターンの影響は明らかであり、 $F(1, 156)=5.12, p<.05, \eta^2=0.032, \eta=0.61$ 。年齢と画のパターンとの相互作用も明らかな影響が見られた。 $F(2, 156)=4.00, p<.05, \eta^2=0.05, \eta=0.71$ 。T検定($\alpha=.05$)で画のパターンによる得点差を比較した結果、5才の子どもが実験画に対する評価が制御画より高く、 $t(59)=3.87, p<.001$;3才と4才の子どもは画のパターンによる差異が明らかではなかった。 $t(39)=-.56, p>.05$ 、および $t(58)=1.09, p>.05$ 。

11



二.研究の過程と結果(5)

結果のまとめ

実験用と制御用の画を評価する際に、3才と4才の子どもは作者がいるかどうかに関係なく、一致した評価を下った。しかし、5才の子どもは助手がいる場合に、評価の結果を変えることが見られ、評価の点数差がプラスになっている。これは追従的行為の指標を適用できるので、5才の子どもが評価のレベルを高めることは一種の追従的行為と言える。

12



一.研究の背景と目的(1)

1. 目的:
幼児段階での追従的行為(flattery behavior)の発生及びそれに影響を及ぼす要素を明らかにする。

2. 関係概念及び大人に対する関係研究

- ・ 社会的グルーミング (Social Grooming) とは、社会性をもつ動物が同種の他の個体にグルーミングを提供することによって、相互関係を強化し、将来の合作関係を促す現象。
- ・ Gordon, 1996; Higgins, Judge, & Ferris, 2003 などの研究によると、人類は他人との相互作用においてはグルーミングの方略を使用していると考えられる。

2



一.研究の背景と目的(2)

本研究では3つの実験を行う:

- ・ 実験1の目的
幼児が追従的方略を使えるかどうかを検証する。
- ・ 実験2の目的
追従的行為の使用が相手の社会地位に影響されるかどうかを検証する。
- ・ 実験3の目的
追従的行為が相手との親密度、相手の社会地位、または両者の相互作用から影響を受けるかどうかを検証する。

7



二.研究の過程と結果(1)

実験1の方法

実験対象

合計159名の子ども:

3才の子ども40名 (M=3.75才, SD=.29; 男の子24名)

4才の子ども59名 (M=4.75才, SD=.31; 男の子32名)

5才の子ども60名 (M=5.72才, SD=.32; 男の子27名)

8

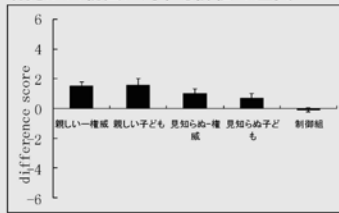


⑩

二.研究の過程と結果(10)

実験結果

図3.作者がいる場合と作者が不在の場合における幼児が人物画に対する評価の差異



17

①

⑭

⑨

二.研究の過程と結果(6)

実験2の方法

実験対象

6才の子ども60名 (M=6.74才, SD=.42; 男の子32名)

材料と手順

子どもたちをランダムに二つのグループに分け、それぞれに大人の助手と子どもの助手をつける。大人の助手のグループでは、実験1と同様に、助手の前と助手が不在の場合でそれぞれ、子どもに実験画と制御画を評価してもらう。一方、子どもの助手のグループで、他のクラスの6才の子どもが助手役を担当する。事前に彼らに実験の手順を教え、練習してもらう。この二つのグループは、助手の身分の違い以外は、実験1の条件と同様である。

13

①

⑩

二.研究の過程と結果(11)

- ・ 実験組子どもの得点差は2(親しさ:親しいと親しくない)*2(助手の地位:大人と子ども)の分散分析を行う。
- ・ **その結果:**親しさの影響が明らかであり、 $F(1, 32) = 5.21, p < .05, \varepsilon^2 = 0.14, \eta = 0.60$ 。他の差異が顕著ではなかった。
- ・ 従って、6才の子どもが親しい相手と親しくない相手に追従的行為を取る際、親しくなく相手より親しい相手にはより程度の高い追従的行為を取ることが言える。

18

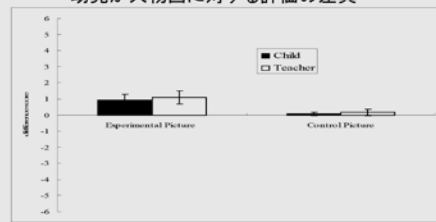
①

⑮

二.研究の過程と結果(7)

実験結果

図2.作者がいる場合と作者が不在の場合における幼児が人物画に対する評価の差異



14

①

⑪

二.研究の過程と結果(12)

- ・ 単一サンプルのt検定で評価得点の差と0を比較した。
- ・ **その結果:**制御画の得点差と0では明らかな差異がなかった、 $t(32) = -1.17, p > .05$ 。
- ・ 親しくない人物画の得点差にも明らかな差異が見られなかった、 $t(32) = 1.32, p > .05$ 。
- ・ しかし、親しい先生、親しくない先生、親しい子どもの画に対する平均得点差が明らかに0より高い。それぞれは $t(32) = 4.54, p < .01, t(32) = 3.93, p < .01$ 、および $t(32) = 2.78, p < .01$ 。

19

①

⑯

二.研究の過程と結果(8)

- ・ 評価の得点差は2(人物画のパターン:目標と制御画)*2(助手:大人と子ども)の分散分析を行う。
- ・ **その結果:**人物画のパターンが得点差への影響は明らかであり、 $F(1, 58) = 11.78, p < .05, \varepsilon^2 = 0.17, \eta = 0.92$ 。他の差異が顕著ではなかった。
- ・ 単一サンプルのt検定で得点差と0を比較した結果、実験画の平均得点差が0より高く、 $t(59) = 3.79, p < .05$ 、制御画の平均得点差が0と明らかな差異が見られなかった、 $t(59) = 1.02, p > .05$ 。

15

①

⑫

三.結論

1. 子どもの追従的行為には明らかに年齢の差異が見られ、5歳〜6歳に現れる可能性が高い。
2. 子どもの追従的行為は、大人という権威対象に限らない。
3. 子どもと評価相手との親しさは、その追従的行為に影響を及ぼす。

20

①

①

二.研究の過程と結果(9)

実験3の方法

実験対象

- ・ 実験2に参加しなかった6才の子ども66名。
- ・ 子どもたちをランダムに二つのグループに分けた。
- ・ 33名の子どもが実験組に参加 (M=6.42才, SD=.27; 男の子18名)。
- ・ 33名の子どもが制御組に参加 (M=6.28才, SD=.30; 男の子17名)。

材料と手順

- ・ 実験手順は実験1と同じ。

16

子どもの感覚・知覚発達障害と家庭教育環境のデザイン

戴淑鳳

Dai Shufeng
北京大学第一臨床医学院小兒科教授

本講演では、以下の内容について紹介します。

1. 感覚（知覚）の概論
2. 子どもの知覚差異
3. 知覚発達と神経生理学
4. 知覚障害とリハビリ対策
5. 知覚発達を促す家庭教育環境設計

1. 感覚（知覚）概論

(1) 感覚と知覚

感覚 (sensation) とは、五感が直接受けた刺激を感じ取る働きであり、2種類あります。ひとつは外部から受けた情報、例えば視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚などであり、もうひ

とつは、内部的な刺激をうけるもの、例えば自分の体の感覚、平衡感覚、内臓感覚（空腹感や渇き）などになります。このような感覚は生まれつきのもので、知覚発達の基礎となります。

そして、知覚 (perception) は、感覚器官に作用したものを解釈し、感覚情報を整合し、解釈するプロセスになります。知覚は複数の感覚を共同して行なった結果であり、脳はこれらの刺激情報を処理し、体験として記憶します。これはいわば認知の過程と言い換えることもできます。

感覚は知覚の前提であり、環境は知覚発達

の土壌と言えます。そして、知覚は子どもの多元的知能及び心理的素質発達の基礎となります。

- 人体知覚には、①視覚 ②聴覚 ③触覚 ④運動知覚 ⑤本体知覚 ⑥嗅覚 ⑦味覚 ⑧内臓知覚などの種類があります。
- (2) 知覚障害

知覚障害とは感覚知覚総合障害を指します。ものの全体像や基本属性については、理解できますが、部分属性、例えば形状、大小、位置、距離、運動や時間などの体験によって知覚の差異が生じるのです。例えば、視知覚障害では読み・書き・計算障害を生じ、学習

遅れになることもあります。

知覚障害には、①聴覚障害 ②視覚障害 ③運動知覚障害 ④触覚障害 ⑤本体知覚障害 ⑥多経路知覚整合問題などの種類があります。

2. 子どもの知覚差異

子どもの知覚は感覚と運動の中から発達し、成熟していくことです。子どもは知覚差異の中で生活していることになります。視覚、聴覚、触覚運動知覚など、一人ひとりの知覚は異なるので、その差異も本人にとっては絶対的なものになります。

学習や情報を受ける経路は、知覚通路と呼ばれます。知覚経路の知覚速度に影響を与えるものとしては、個別の知覚レベルや個人の経験が考えられます。また、知覚を生じて、正しい知覚を生じる人と、そうでない人がいます。

人間には必要のない知覚をブロックするための能力がありますが、私はこれを「超負荷知覚システム」と呼んでいます。知覚情報が、2つ以上の経路から来たとき、知覚発達障害の子ども（例えば、ADHDやLDなど）は

健常児より、干渉をブロックする能力が低いと考えられます。

つまり、個体が異なれば、情報処理能力も異なるわけで、子どもによっては、与えられた情報が多すぎることによってショートする場合もあるのです。また、全体知覚と部分知覚が異なるために、例えば、図形や漢字などの認知に支障が出ることもあります。

3. 知覚発達と神経生理学

人体感覚と感覚器官の対応は以下の通りです。

- ・視覚—視網膜
- ・聴覚—内耳耳蝸
- ・嗅覚—鼻嗅上皮
- ・味覚—舌味蕾
- ・前庭感覚—内耳の前庭器官…三半規管卵形嚢・球形嚢
- ・触覚、痛覚、温度感—皮膚遊離神経末梢
- ・本体感覚—肌腱、関節嚢内の感覚器

人間はこれらのさまざまな感覚器官で刺激を受けて興奮し、その感覚が神経システムによって、神経経路を通じて中枢神経システム

に到達し、大脳へたどり着きます。そして、脳を刺激し、感知覚を生じて、身体に指令を出すことになります。いわば感覚情報は知覚発達の食糧であり、環境は知覚発達の土壌であると言えるでしょう。

4. 知覚障害とリハビリ対策

子どもの主な知覚障害には以下のものがあります。

①触覚障害—他者に対して行き過ぎた防御行動を取り、気分家で社会性の発達に問題があり、触覚が鈍く、目的なく周囲のものを触りまくったりします。

②前庭知覚障害—空間知覚に問題があり、不安がちで、集中ができない、衝動的で学習能力が低いなどの行動が見られます。

③本体知覚障害—言語障害があり、行動がぎこちない。生活・学習に秩序が欠ける傾向があります。

④聴覚障害—聴覚に障害があるために、理解力や分別能力などの学習機能への障害も生じます。

⑤視知覚障害—視覚に障害があるために、図

形の認識、読字、計算などの学習活動に支障が生じます。

5. 知覚発達を促す家庭教育環境設計

乳幼児の感覚・知覚は五器と環境が互に影響し合って、徐々に発達し、成熟してくるものです。ゆえに乳幼児は常に知覚のずれの中で生活していると言えます。

子どもの知覚発達とレベルは環境の質と密接に関連しています。家庭教育環境は、知覚発達障害の主な要因となり、子どもの心理行動や落ちこぼれを引き起こす重要な原因とな

ります。したがって、以下に述べる家庭環境と、そうした要因を考慮した家庭環境づくりが大切になってきます。

(1) 妊娠前の家庭環境づくり

- ・最も良い健康状態の時に妊娠する
- ・最も良い心理状態の時に妊娠する
- ・最適な年齢で妊娠する
- ・経済状況が許す時に妊娠する

(2) 妊娠期の胎教環境づくり

- ・母親学級を受け、親としての「資格」をもって、出産に挑む
- ・科学的・体系的に胎教を行う

- ・胎児にバランスのよい栄養を与える
- ・赤ちゃんに有害な環境は、大小にかかわらず極力避ける（例えばウイルス・放射線・化学薬品・酒・煙草、化学毒物など）

(3) 成長の臨界期（0-3才）の家庭環境づくり

- ハード面…よい住宅環境
- 十分な活動空間
- ソフト面…和やかな家庭雰囲気
- 科学的な教育
- 家庭内における様々な役割
- 自由にできる空間

触覚知覚障害のリハビリ

リハビリ教室	家庭内訓練
ニジローラー	タオル巻
ボールプール	布で体を磨く
吊り輪	ドライヤーゲーム
ボール遊び	砂浴
※マッサージ	塗料浴
	敷物サンド
	タオル体操

前庭平衡知覚障害のリハビリ

リハビリ教室	小さなスケートボード：うつむく滑走、仰向く滑走、回転滑走、みんなつながって滑走、ほら穴に入る
	大きな滑り台：うつむく滑走、なげる、障害物を越える ぶらんこ：座り式、うつむき式、よこわたる式、棒を挿す遊び 平衡台：ボールの投げと受け止め、立って揺れる トランポリン： 回る浴槽： 揺れる一本橋：
家庭内訓練	親子縄跳び
	親子でボールのパス練習 行動習慣の養成訓練 地面にうつ伏せてボールを押す訓練 聴覚視覚の訓練

本体感知障害のリハビリ

リハビリ教室	家庭内訓練
小さなスケートボード	親子の力比べ
トランポリン	親子縄跳び
揺れる一本橋	地面にうつ伏せてボールを押す
こま	後ろ向きの滑り台

視知覚能力障害のリハビリ

- パズル
- トランプ
- 迷路訓練+運動知覚
- 字の模倣
- 積み木
- 異同を探す
- 数字、簡単な言葉のゲーム